

第6回大会
関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
報告書

D e s i g n
to N e x t Ⅱ

～ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育のあり方～

共 催 茨城県教育委員会、茨城県生涯学習・社会教育研究会、茨城大学

主 管 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会

協 賛 NPO法人ひと・まちなっとわーく、NPO法人インパクト、NPO法人日本スポーツ振興協会
(公財)茨城県教育財団、(公財)日本教育公務員弘済会茨城支部

後 援 福島県教育委員会、栃木県教育委員会、群馬県教育委員会、埼玉県教育委員会
千葉県教育委員会、神奈川県教育委員会、国立青少年教育振興機構
茨城県社会教育委員連絡協議会、茨城県公民館連絡協議会

協 力 国立教育政策研究所、茨城県教育庁社会教育主事会

<目 次>

はじめに	1
第6回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会開催の考え方	2
第6回大会テーマ及び開催形態	8
第1部	
【基調講演】	9
【インタビューダイアログ】	11
【基調講演を受けて】	13
第2部	
【オープニング】	17
【パネルディスカッション】	18
【シンポジウム】	25
【クロージング】	34
ふり回り	
【第6回大会を終えて】	35
【ポエム】 マスクの下に～「4つの免疫」を学ぶ～	39
【アンケート結果】	41
1 事業の実施体制	46
2 運営組織・活動内容	47
3 第6回大会チラシ	48
4 大会参加者	52
5 第6回大会実行委員等名簿	53
6 歴代大会テーマ等	54

はじめに



第6回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会は、人類未曾有の新型コロナウイルス感染拡大の中での開催となりました。換言すれば、この時代に生きる「全人類が共通の同時代的課題に直面した」中での開催となりました。その結果、本交流会の開催に際して、**①社会的状況と交流会の意義、②時代的転換（パラダイムシフト）と開催内容、③「3密」回避と新しい開催方法の提案の3つの検討を深める必要がありました。**4回の実行委員会、9回の役員会が開かれ、刻々変化しつつある環境下での検討と決断が必要となりました。

開催の決断は、本交流会の意義と現況を深める中で行われました。全国の社会教育関係者や市民運動に携わる人々が、新型コロナウイルス感染の前でたじろぎ、立ち尽くしている状況を目の当たりにしたからでした。戦後、公民館による学習活動は、国民の中に新しい課題に取り組む力を形成してきました。そして、多くの市民活動を支えてきたのが社会教育ではなかったか。それならば、この時期、社会教育の意義が真に問われているのではないだろうか。

「学び」を放棄して、この状況を打開することはできないと判断し、新しい時代の先駆けとなるべく第6回大会を開催することにしました。

開催内容は、大会テーマ「Design to Next II」にあるように、社会構造や意識が転換する時期に、社会教育はどう対応するかという課題設定となりました。第5回大会の基調講演（日本生涯教育学会 会長 合田 隆史 氏）を受けて、AI社会の到来という時代転換を中心に次の時代を設定していました。しかし、パンデミック状況の中、新たな時代転換として「ウィズコロナ時代」という課題を付加することになりました。時代転換期、私たちは多くの「学び」と経験を通して多様な課題に対応してきました。そこで、「今」と「過去」「未来」を学び、新しい社会枠組み（パラダイムシフト）と社会教育の役割を再確認できる内容にしたいと考えました。

人類の歴史をたどり社会教育の意義を再確認する第1部（京都大学 前総長 山極 壽一 氏の基調講演「人類の進化に合った教育とは何か」、および現代社会とのかかわりを問うインタビューダイアログ、社会教育の新しい意義を考える「基調講演を受けて」）を令和2年12月から配信をしました。

そして、第2部は令和3年2月から配信を始めました。「事実（現場）から学ぶ」ことを主眼としたパネルディスカッション「新型コロナウイルス対応の実際」では、他分野の3人のパネリストによって、現実の過酷さや立ち向かう姿勢が迫力を持って語られました。また、社会教育の新しい可能性を探るシンポジウムでは、コロナ禍の中で、新しい社会教育の手法・考え方が実践的に語られました。令和2年～3年にわたる2部構成の本大会は生涯学習・社会教育事業の新しい展開を模索する企画となりました。

開催方法についても、オンデマンド配信を基本にして実験的な試みとなりました。映像による交流は、予想をはるかに凌駕する緊迫感を伴う情報配信につながったと感じています。

最後に、試行錯誤の第6回大会を支えた実行委員会の皆さんにお礼を申し上げたいと思います。そして、社会教育の新しいページを開いたという自負を共有したいと思います。第7回大会でまたお会いしましょう。

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会

実行委員長 菊池 龍三郎（茨城大学名誉教授）

第6回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究 交流会開催の考え方

第6回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会

第6回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会は、新型コロナウイルス感染症感染拡大という、人類の生存にとって未曾有の出来事が生じている中での開催となった。したがって、実施すべきなのか、また実施するならどのような方法で可能なのかを厳格に検討する必要がある。そして、それは「AI 社会の到来」・「コロナ後の新しい暮らし方」という二つの社会転換を前にして、生涯学習・社会教育の役割はどう変化し、どう立ち位置を定めるべきかを模索しながらの試みであった。

1 社会教育についての「今」を知る

社会教育の出発は「今を知る」ことから始まる。「今を知る」ことから、「学び」の内容を見定め、「学びの様式」を模索し、暮らしを変えていく。その視点に立ち、「今」を確認する時に、提案されたのが以下の4点であった。

- (1) 多くの市民活動（コミュニティ活動、地域福祉活動、青少年育成活動など）が、この事態にたじろいでいる状況である。この活動の多くは大なり小なり社会教育による「学び」と関連性を有しており、今、社会教育的学びを強く必要としている。
- (2) 大量生産・大量消費・大量廃棄型社会への転換が行われた高度成長時期にも、「日本人の新しい暮らし方」が問われ、社会教育は公民館を中心に各種団体と連携してこの課題に対応し続けた。戦後の民主主義社会の形成に関してもそうだった。AI 社会の到来というパラダイムシフト（社会転換）に関する社会教育の対応を模索しているときに起きた変動が「ウィズコロナ時代の到来」だと考えられる。
- (3) 未曾有の災厄（コロナウイルスパンデミック）は、本実行委員会に大きな課題を突き付けている。しかも、それは、全国の生涯学習・社会教育関係者が同じように直面している課題である。だから、進みながら考えることにしよう。そして、考えながら進むことにしよう。そして、全国の関係者と早急に連携しあうべき「今」にしよう。
- (4) コロナウイルスと人類はどう戦えばいいのか、そして、コロナウイルス後の「新しい暮らし方」をどう作り上げればいいのか。戦いの最前線である医療や福祉の現場は、社会教育から少し距離がある。分野や術語の違いから切断されている各専門領域を架橋することこそ社会教育の課題である。だから、他領域の意思に目を向け、翻訳し、市民の学習につなげることが肝要だ。

この四つの視点を保持しながらの開催を志向することになった。

2 令和2年度中にこの課題を検討し、方向性を議論することは重要である

第6回大会の開催を、令和3年度に延期することも考えられた。しかし、数度の役員会と実行委員会を重ねる中で、令和2年度内に開催することこそ重要だという認識に至った。そのプロセスの中で確認されてきた認識は次の4点である。

- (1) 令和3年度、全国の社会教育・生涯学習関係者は、主たる課題を「コロナ後の社会教育の動向」に焦点を絞って事業展開を図ってくると思われる。しかし、「コロナ後の社会教育」を作り上げるためには「コロナ禍の社会教育」のあり方こそ重要ではなかろうか。コロナ禍の中で、最前線の暮らし・考え方や市民の困惑など社会教育の課題は「今」にあると考えた。
- (2) だから、第6回大会は、実践交流の意味を深化させ、交流集会自体を「コロナウイルス対応の実践の場」と位置付ける。つまり、実践後の研修交流ではなく、実践を目指した研究交流と考えてよい。それこそが社会教育のライブ性ではないか。
- (3) そして、本交流会での学び・検討に基づいて、令和3年度、各地で実践される生涯学習・社会教育活動への出発点にしたいと考えた。そのためには、是非とも、令和2年度中の検討が必要だ。自粛は必要だが萎縮は不必要だ。
- (4) 検討内容は、全国の関係者に早急に伝え、共有したい。だから、同時的に共感できるオンデマンド方式を採用する。

3 「知ることから始まる」が社会教育の哲学である。

二つの契機が、大きな社会変動の前触れとなっている。「AI社会の到来とSDGs」(第5回大会 合田 隆史氏 講演)とコロナパンデミックである。未曾有の出来事が動き出し始めた時、どのような内容が検討されるべきなのだろう。第6回大会のテーマは「Design to Next II」と決定した。それは、次代に生きる人間への「社会イメージの提案」に近いものであった。

そこで、原点に立ち返って、社会教育の哲学に依って検討を行った。以下5点の考え方が検討の柱になったものである。

- (1) まずは「学ぶ」ことである。新型コロナウイルスの特徴と対処方法を学ぶことが第1歩である。医療分野や薬学・細菌学分野の到達点を知ることが必要だと考えた。解らないから怖いのだ。だから、積極的に他分野の視点を学び、知ることから始める。

しかし、一方で「コロナウイルス惑星」とも称される地球環境について、人類とウイルスの共進化を学び、社会的対応が歴史学的に理解されたり、人間の中に生かされているウイルス特性の研究など生理学分野での報告も提出されている。数多の科学領域が、それぞれにウイルスと人間の関係を語り始めている。どの切り口が、市民の学習につなげる可能性が高いかを考慮した結果が次の学習の三つの論点であった。

(2) 学習内容の論点は3点と考えた。

① 新型コロナウイルスの特徴と戦い方

特に、多細胞生物の傑作としての人類の免疫システムを学ぶこと。「ふり返り」のポエムにもあるように、「4つの免疫」システムと免疫不全・免疫暴走の視点が解り始めた。

② 人類の「ウイルスとの長い戦い」から現代社会の意味をどのように学ぶのか

スペイン風邪との戦いや黒死病（ペスト）との戦いから学んだことを生かしているのか。感染防止のために歴史は何を教えてくれるのか。ペストがヨーロッパの中世の幕引きにつながったことを知ると、AI社会への幕引きが新型コロナウイルスかと考えてしまった。

③ 「コロナウイルスとの戦い」の中で、生涯学習・社会教育の役割は何か

そして、「ウィズコロナ時代の社会教育の意義」は何かを考えざるを得ない結果となった。社会教育は往々にして「3密」そのものの事業形態だったのだから、新しい「フィジカルディスタンスとソーシャルディスタンス」の課題に直面することになった。

(3) 学習内容のもう一つの視点は、社会教育の目的である「人間の幸せ」にほかならない。人間の子育てや人間の社会について基本に立ち返る必要性を感じた。私たちは、700万年前にチンパンジーから枝分かれした哺乳類だ。「どうやって、生き延びたのか」からを学び始めるべきとの結論になった。学びつつ活動すること、これが課題だ。私たちは「不明—不安—不信—不満」の「負（不）のスパイラル」を乗り越えなければならない。

(4) 主体的な「学び」は、市民の豊かな社会教育実践につながるはずである。そのため手法も相互確認し、成果を共有する必要がある。

4 私たちは「人類の幸せ」と「戦いの前線」から教わらなければならない。

具体的に、どのような内容をどのような人に依頼できるだろうか。課題は二つ。

「パラダイムシフトと人類の幸せ」と「コロナパンデミックとの戦いと社会教育の役割」のテーマこそ、「社会教育の今」を理解できる柱ではないだろうか。

(1) 第1部は京都大学 前総長の山極 壽一氏に「人類の進化に合った教育とは何か」を主題にして基調講演をいただいた。そして、コロナ後の社会教育課題として、AI社会での難題をインタビューダイアログとしてまとめた（聞き手：茨城県生涯学習・社会教育研究会 長谷川 幸介）。この二つを受けて、菊池 龍三郎実行委員長による「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の新しい役割をどう考えるか」の講話が提示された。

そして、この内容は令和2年12月からオンデマンド形式で配信している。

(2) 第2部はコロナ感染第3波がピークを迎え始める時期の開催となった（令和3年2月）。予定していた2会場による2元配信やパネラー等を1会場に集めての討議も変更せざるを得なかった中での開催である。

① 「新型コロナウイルス対応の実際」と題したパネルディスカッションは、医療現場や市民活動分野、経済活動領域からの生々しい報告を提示し、社会教育の社会的使命を顕在化した（パネリスト 茨城県看護協会 会長：白川 洋子氏、つくばみらい市社会福祉協議会地域福祉推進課 課長：松尾 好明氏、水戸市泉町仲通り商店会 会長：忠 文夫氏、コーディネーター 茨城新聞社編集局論説委員室 論説委員長：藤枝 智昭氏）。

「逃げるわけにはいかない」現状の中でも、連携し、共感する人間の姿と苦境に対応する覚悟が胸を打つ。飲食店経営の窮状と医療崩壊の瀬戸際の現状と覚悟が心を揺さぶる。

② シンポジウム「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性」は、生涯学習・社会教育関係者による実践報告を中心としている。しかし、その報告の一つ一つが、コロナ禍中の実践であり、緊迫感をもって、今までの社会教育実践を問う内容となっている。「新しい葡萄酒は新しい革袋に」のごとく、コロナ後の社会教育の可能性にあふれたものとなった（シンポジスト 前橋市桂萱公民館 館長：茂木 勇氏、茨城県立図書館 朗読・読み聞かせ講師：澤 則子氏、桜川市教育委員会生涯学習課 社会教育主事：高島 誠氏、コーディネーター 茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 主任社会教育主事：山崎 英男）。

(3) まだまだ課題は山積みだ。学校教育現場からの ICT や AI 活用の苦闘も教わらなければならない。コミュニティ・スクールの対応も教わらなければならない。認知症対応の現場からの報告もまだである。それらの報告が「新しい暮らし方」への道標に違いないから、社会教育の「橋渡し」機能は極めて重要だと再認識している。

地域活動の現場は、「つながる」ことを行動原理に据えてきた。しかし、「3密」抑制の行動は、この地域活動原理とは真っ向から衝突せざるを得ない。「3だけ」（自分だけ・今だけ・お金だけ）意識の拡散の中でどう苦闘し、展望を拓こうとしているかも知りたいのだ。

(4) クロージングは、本交流会の意義をまとめ、第7回大会へ向けての期待と課題を提示した（茨城県生涯学習・社会教育研究会 副会長：池田 馨）。

5 現代社会への警鐘を「コロナウイルス『三つの感染』」から検討したい。

第6回大会もまたコロナとの戦いの最前線だとの認識に立つことにした。感染拡大の中、新たな「学びの様式」や他分野との共感・連帯を宣明することはやはり最前線の一角ではないかという思いからである。したがって、新型コロナウイルスを知る場合、次

のような「三つの感染」とのせめぎあいと理解することにした。

- (1) 「三つの感染」：①体の感染 ②心の感染 ③社会の感染で新型コロナウイルスの影響をとらえたい（日本赤十字社は①身体の感染②不安の感染③差別の感染と表現している）。
- (2) 体の感染：コロナウイルスから個人をどう守るか（主として予防や治療）。
心の感染：心の中に生じる差別意識（主として人権問題：エイズなど）
社会の感染：グローバルな戦いをすべき時に、共有・連帯ではなく非難・競争（米・中間の確執やワクチン配布問題など）へと傾斜する状況
- (3) 新型コロナウイルスを「私の発見」（個人の課題）と「私たちの発見」（社会や人類の課題）の二つの側面から整理する。
- (4) このことは、「三つの感染」に対する人間の防御反応を示唆している。「四つの免疫」として理解される。ウイルスとの長い戦いは①身体免疫（自然免疫、獲得免疫や交差免疫作用など）を作ることによって乗り越えてきた。ウイルスと生物のこの関係は 40 億年を超える営みであり、共進化といわれている。

第 2 の免疫は②心の免疫である。人類は個としては生存できない生物である。したがって、人間関係・社会関係などのように支えあいのシステムを時代とともに進化させてきた。あいさつなど連帯・共感の文化は「心の免疫」システムではないだろうか。

③第 3 は「社会免疫」である。一人では生存できない人類が発明した「幸せ装置」＝社会による免疫が機能しているといえる。この免疫も「差別や孤立」などのサイトカインストーム（免疫暴走）を起こし始めている。④第 4 は、生態系という名の「地球免疫」だと考える。人類の生存の基盤であり、命の母である地球環境の再生能力が弱まっている。地球温暖化は免疫不全症候群ではないだろうか。

- (5) こう考えると、ウィズコロナ時代の社会教育の課題の構造が見えてくる。

6 私たちの社会は、「今」を到達点と捉えるべきなのだろうか、それとも出発点と捉えるべきなのだろうか。

新型コロナウイルスのパンデミックは、人類生存の到達点なのだろうか、それとも出発点なのだろうか。社会教育はこの状況をどうとらえるべきかについても検討が必要であった。

- (1) パンデミックは、地球環境に攻撃的であり続けた哺乳類が直面する結果という側面を持っている。人類は地球環境に適応だけして生き延びた生物群とは異なる。自分に合わせて地球環境に手を入れる（＝開発）という行為を生存条件にしてきた（他の生物の多くは環境に自分を合わせる＝適応戦略をとった）。その結果が、ウイルス環境との接近、交接を生み出したのは間違いない。
- (2) 1. 2 万年前の農業革命は、食糧確保のために土地を掘り起こし、森林を伐採し、

野生動物の家畜化を推し進めた。その結果、地球上の哺乳類の8割以上は家畜であるといわれている。すべてがウイルス環境の破壊につながった。そして今、ロシアの永久凍土が溶け出し、山林火災が自然生態系への大きな打撃となっている。こうして、私たちの生存は、コロナウイルスを流民化し続けている。

- (3) 一方で、社会教育は「今」を出発点であるともとらえている。明日の社会のありようを検討し、そこへの一歩と考えることも可能である。国連のSDGsに提示された私たちの「幸せ目標」は次代の社会目標を整理している。
- (4) 私たちは、到達点としての学びと出発点としての覚悟・合意を必要としているように思える。

7 令和3年度第7回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会へ向けての実践はもう始まっている。

私たちの後ろには、全国で逡巡し続けている仲間がいる。

本大会は、その仲間に向けてのメッセージを創る社会教育実践に他ならない。

全国の仲間と、学びを共有し、ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の新しいカタチを共感するために、映像による配信という形式をとることになっている。

人類みんなが「当事者性」を有する社会教育課題だと考えている。

第6回大会テーマ及び開催形態

Design to Next II

～ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育のあり方～

第1部

オンデマンド配信 令和2年12月25日から令和3年3月30日

基調講演

「人類の進化に合った教育とは何か」

講師：山 極 壽 一 氏（京都大学 前総長）

1952年生まれ東京都出身 霊長類学者・人類学者 ゴリラ研究の第一人者
京都大学理学部卒 京都大学大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学、理学博士
京都大学霊長類研究所助手、同大学院理学研究科助教授を経て同教授
2014年10月から2020年9月まで京都大学総長

インタビューダイアログ 話し手：山極 壽一 氏

聞き手：茨城県生涯学習・社会教育研究会 会長 長谷川 幸介

「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の新しい役割をどう考えるか～基調講演を受けて～」

実行委員長／茨城大学 名誉教授 菊池 龍三郎

第2部

オンデマンド配信 令和3年2月24日から令和3年3月30日

オープニング

実行委員長／茨城大学 名誉教授

茨城県教育委員会 教育長

国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター長

菊池 龍三郎

小泉 元伸

上田 浩士 様

パネルディスカッション

「新型コロナウイルス対応の実際」

コーディネーター 茨城新聞社編集局論説委員室 論説委員長

パネリスト (公社) 茨城県看護協会 会長

つくばみらい市社会福祉協議会地域福祉推進課 課長

水戸市泉町仲通り商店会 会長

藤枝 智昭 氏

白川 洋子 氏

松尾 好明 氏

忠 文夫 氏

シンポジウム

「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性」

コーディネーター

茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 主任社会教育主事

シンポジスト

前橋市桂萱（かがや）公民館 館長

茨城県立図書館 朗読・読み聞かせ講師

桜川市教育委員会生涯学習課 社会教育主事

山崎 英男

茂木 勇 氏

澤 則子 氏

高島 誠 氏

クロージング

茨城県生涯学習・社会教育研究会 副会長

池田 馨

第1部

基調講演

「人類の進化に合った教育とは何か」

講師：山 極 壽 一 氏（京都大学 前総長）

1952年生まれ東京都出身 霊長類学者・人類学者 ゴリラ研究の第一人者
京都大学理学部卒 京都大学大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学、理学博士
京都大学霊長類研究所助手、同大学院理学研究科助教授を経て同教授
2014年10月から2020年9月まで京都大学総長

教育をするのは人間だけ 教育という人間の不思議な行為

私は40年以上アフリカでゴリラを見てきました。ゴリラの群れの中にいると人間の不思議な行為が見えてきます。その中に「教育」があります。「教育」をするのは人間だけです。人間に近い類人猿（チンパンジーやゴリラ）にも「教育」はほとんど見られません（動物の場合「教示行動」といいます）。教育とは、自己犠牲（自分が損をしても相手が得をする）ということを教える側が分かっているといけません。だから基本的に動物に教育はありません。



なぜ、人間だけに「教育」が発達したのか、ゴリラと人間の子育てを比べてみると分かります。ゴリラの赤ちゃんは1.6kgぐらいで非常に小さく産まれます。そして3年間お乳を吸います。人間は産まれるとき3kgを超えます。大きく産まれるから発達しているのではなく、母親に自力で掴まれないほどひ弱です。成長が遅いにもかかわらず1～2年で乳離れをします。

類人猿は離乳するときすでに永久歯が生えていて大人と同じ食べ物が食べられます。人間は離乳してもまだ乳歯のままで、大人と同じ物が食べられない長い離乳期があります。また人間には、繁殖能力がついても繁殖しない、青年期があり、老年期が長いです。離乳期、青年期、老年期は人だけに組み込まれた不思議な時期で、教育と非常に強く関係しています。

人間の成長にとって親以外の手が必要になる時期がある

生まれたばかりの人間の赤ちゃんが重いのは体脂肪率が高いからです。ゴリラの約5倍です。それは脳の成長を助けるためで、人間は脳の発達を優先させて身体の成長を遅らせています。12～16歳で脳の発達が止まると、身体の成長にエネルギーを回します。すると急に身体が成長します。これを思春期スパートといい、この時期は心身の成長のバランスが崩れ死亡率が上がります。

離乳期と思春期スパートの時期は、親だけでは育てられません。周りの人が子供たちの力を高める必要があります。これが、共同保育が必要になった理由で、その結果「家族」ができ、複数の家族が集まって共同体ができました。共同体は教育に連携しています。

共同体を成り立たせるものとは

人間の脳はゴリラの約3倍あります。人間は言葉を話すので、脳が大きくなったと考える人もいますが違います。言葉の登場は今から約7万年前であり、現代人の脳の大きさになったのは約40万年前です。いったい脳はなぜ大きくなったのでしょうか。霊長類の比較分析によると、脳は集団の大きさに対応して大きくなったのです。この数値を応用すると、化石人類の脳の大きさから集団規模を推定でき、ゴリラと同じ脳の大きさの時代には10～20人です。200万年前に脳が大きくなり始

めると 30～50 人、現代の 1500 cc の脳では 150 人の規模ということになります。

この集団規模は現代でも、スポーツや、学校のクラスなどに匹敵し、それぞれ言葉によらない身体でのコミュニケーションで支えられています。人間は今でも、身体を共鳴させることができる仕組みによって、地域共同体を作っているのです。

言葉の功罪と人間社会のサル化

サルは強いのか弱いのかを基にして社会のルールを作っており、共感力をあまり使っていません。近年、人間の社会も共感力をあまり使わないようになり、利益優先、信頼関係を消失させる方向に向かっており、サル化が進んでいるといえます。

知識を伝える教育は過去のもので、これからは学校の外にキャンパスが広がっており、いろいろな人が教え教えられる立場になります。でもそこには共感力がなければ成り立ちません。自分だけが学べば良いという精神では新しいクリエイティブなものを議論できなくなってしまいます。

ウィズコロナの時代 目に見えない微生物とどうやって共存したらよいか

新型コロナウイルスにより、私たちは多くの社会的行為を制限されました。教育の現場での対面授業や余暇として楽しんできた芸術活動、スポーツ、コンサートなどです。一方で、ステイホームによって、子育て、介護、家庭内の教育など、それまで労働とは見なされていなかったことが実は重要だと気付きました。それらをこれからどう位置付けていったらよいのが課題です。

人々は食べなければ生きていけません。その食物をどう回していくのか、どこにお金を使うのか、どこでお金を稼ぐのか。地方と都市の価値は逆転しつつあります。今、「豊かさとは何か」という視点で、これまでと違うことを学ばなければいけないと思います。そのために、これまでの学校教育を外に向けて開き、人々が学びの場をいくつも作って、そこで未来をいっしょに考えることが必要になっています。

そして、人間として生きる自覚や誇りとなる、自己肯定感、自己実現感、社会とのつながりをいかに失われにくくするかが重要です。これからはコモンズ（公共財）を広げていかなければいけません。人々のマインドとしてシェア（共有して分け合う）という精神を高めていかなければいけないと思います。それには承認し合うこと、期待し合うことが必要で、シェアできるコモンズを目の前にたくさん作るべきです。政府主導ではなく地方行政や民間の力によって増やし、お互い何ができるかを学び合う必要があります。

みんなで一緒に学ぶ場を作ることが必要です。情報通信機器を賢く使いながら、言葉だけで会話をするのではなく、五感を通じた学びの場、交流の場を作っていくことが重要です。

シンクローカル アクトグローバル

世界の都市が均質化している中、地方には個性が残っています。個性に合った暮らしが実現した上で、それぞれの地域がつながるようなネットワークを地球を舞台に広げていくことが重要だと思います。地域で学び、地域で実現することをまず考える。それを地球全体のプラットフォームに乗せていくことがこれからの学びであり未来づくりの目標となると思います。

インタビューダイアログ

- ・話し手：山 極 壽 一 氏（京都大学 前総長）
- ・聞き手：長谷川 幸 介 氏（茨城県生涯学習・社会教育研究会 会長）



（長谷川）人間は同調する力を失ってきているのでしょうか

（山極）自己実現、自己責任が強調されるあまり、人々がばらばらになってきています。お互い助け合い、時間を一緒に過ごしながらか、楽しんでいくという生活スタイルがとりにくくなりました。自分の時間は自分で使う、そのためにお金を稼ぐ、そういう世の中になってしまったのではないのでしょうか。

（長谷川）インターネット格差について

（山極）情報にアクセスできるかどうかで生活の利便性に格差ができていきます。それが進めば経済社会の格差は広がっていくと思います。特に、情報を収集してたくさんもっている企業は、それを使っているいろいろな商売ができます。それが、GAFA といわれる世界のプラットフォーマーたちが寡占企業だと言われる所以です。



（長谷川）インターネットはコモンズなのでしょうか

（山極）インターネットはもともとコモンズの性質を持っています。しかし、コモンズは参加する人がすべて平等であるべきで、その権利が保障されなければいけません、今のインターネットは相当の格差があります。だからルールを作らなければいけません。倫理の問題、平等性の問題から、早急に様々な処置が必要ではないかと思っています。

（長谷川）子供たちに同調力や共感力をどのように身に付けさせていけばよいのでしょうか

（山極）これまでは、自分の時間は自分のために使うのが当たり前でした。しかしこれからは、みんなの時間を楽しむことが大切です。自分の時間を相手に合わせるならば対価がほしいと思うことでしょう。そうではなくて、参加するために自分の時間を差し出し、お金ではない大きな価値を得られると思うことが重要です。それがコモンズ、シェアという考えです。シェアをさせてもらうために自分の時間があるということです。

（長谷川）時間の考え方について

（山極）私たちがステイホームでイライラしてしまったのは、家族は体の大きさや生理状態が違う人たちが集まっていて、同じ時間、同じように生きるのは難しいからです。それがゴリラはできません。時間がコストではなく楽しいものだというわくわくする予感があるからです。私たちは、相手ということによって豊かな時間を過ごせていると考えることが必要です。それが生きる糧になれば、時間の使い方を変えられます。

(長谷川) **新型コロナウイルスへは体の免疫だけでなく心の免疫も必要なのでしょうか**

(山極) 私たちは、環境の工業化と一緒に生物の工業化をして、効率のよい均質な物や家畜を作ってきました。しかし、生命はそういう物ではなくて、人々も自然も非自然的なものも、つながり合っているという中で考えていく必要があります。何かをすればその反作用が起こるわけで、新型コロナウイルスも、人間が自然を破壊した結果として様々な因果関係が出てきて、人間にうつったということがみえてきます。根元を絶つには、もとの健全なつながりに戻すことが必要です。

(長谷川) **コロナ後の社会において生涯学習・社会教育に期待すること**

(山極) 私はデザイン力だと思います。昔の家は、たくさんの職人が施主と相談し、近所の人たちも関わって作っていました。家を建てる人々とのつきあいが始まり、家は改築できる物もありました。今は、家は設計図どおりで、建て増しも簡単にはできません。そういう社会観が衣食住から出てきて個人がばらばらになっていきました。もう一度つながりのある暮らしのデザインを自分たちで行う時代を作らなくてはいけないのではないかと思います。日々話し合うことができるような環境です。

昔の子どもは近所の噂話から、こんなことをしたら笑われる、こんなことをしたら罰を受けると、耳で覚えてきました。今は学校で習うか、インターネット上で、こういうことが罰になるということを文字化して覚えなくてははいけません。これでは身に付きません。近所で噂話をしている人がいるからこそ、世間が分かります。これが、一番身に付く道德教育です。文字で教えなければならなくなかったのが今の世情を表しているのではないのでしょうか。

これからは、人々のつながりを作っていくこと、自分たちで生活をデザインするという意識と意欲をもつことが重要だと思います。



ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の新しい役割をどう考えるか

菊池 龍三郎

茨城大学名誉教授

関東近県生涯学習・

社会教育実践研究交流会実行委員長



～基調講演を受けて～

※ 「基調講演を受けて」で使用したパワーポイントシートを掲載しています。

1

なぜ人類はここまで進化を遂げたのか

- なぜ人類はここまで進化を遂げたのか。なぜ人類には集団や社会ができ、ここまで巨大になったのか。という根本的なテーマに山根先生は丁寧にわかりやすく説明して下さいました。ここでは一つだけ取り上げ、考えてみたい
- ゴリラの赤ちゃんは生まれた時からずっと**母子密着**でお母さんを離れない ⇒ お母さんは色々忙しいので、つい離れてしまう ⇒ 途端に**泣き出す** ⇒ 特に**新米のお母さん**は全てに不慣れなため困ってしまう
- 近くに**いる先輩お母さん**達が近寄ってきて泣いている赤ちゃんをあやしたり、世話をくれる ⇒ 次々と来る。子どもも！

2

霊長類の子育てには協力者が必ず必要すべての始まり

- 霊長類の子育てに不可欠な条件 ＝ 子育ての協力者がいること
- さて、助けて買ったゴリラの新米お母さんは、今度は「お返し」をする。
- こういう「してあげたり、して貰ったりの互利的関係」ができ、やがて、よその家族の子どもも赤ちゃんの遊び相手になる。
- 人間、ゴリラなど霊長類では子育てを通して「集団」や「社会」が発生し発展 ＝ 人間の集団、社会だけが巨大化

3

危機の時期が豊かな発達の時期になるのは「協力者・仲間」がいるから

- 赤ちゃんはその後「離乳期」、「生育期」、「思春期」などの危機の時期を迎えるが、この時の子育ては「他人の大人」と「子ども達の仲間集団」に委ねられ、危機の時期は逆に飛躍的な成長の可能性をはらむ時期にもなるが、逆に巨大化に伴い集団が成長発達を阻害することにも。
- 遙かに遠い昔、子育て上の必要から生み出された「集団」や「社会」。その最も大事なポイント・・・「互利的関係」「信頼」「ネットワーク（絆）」・・・このポイントは集団の規模が何百倍、何千倍と巨大化しても不変。

4

互酬性①子育ての協力関係

- これを赤ちゃんゴリラの身になって考えるとどうか？ 親に代わって、きょうだいとか他の大人達が、ちょい、ちょい気軽に自分をあやしたり、遊び相手になったりしてくれる存在、親じゃないが何となく安心して自分を任せられる。
- 大事なこと・・・赤ちゃんは、ここから「信頼」という最も大事な価値を知る。
- 親以外の親たちやその子ども達までも子育てに協力する関係 ⇒ これは他者への「信頼」「社会性」「共感能力」を育てる上で決定的に重要（※「互酬性」の「酬」は「お返しをする」、「むくいる」の意。）

5

「互酬性」②「信頼」「ネットワーク・絆」

● ゴリラの新米のお母さんは手一杯の時、仲間が代わって赤ん坊を世話してくれる。もう感謝！感謝！⇒でも、やって貰っただけとはいかない。他のお母さんが育児できない時には、ごく自然にそこの赤ちゃんの面倒を見る。大事なことは親同士の間で「して貰う」「して上げる」という「互酬的な関係」がある。この関係が豊かにあると、信頼し合う関係が発生。この信頼で繋がった関係がさらに繋がって「集団」、「社会」となる。

●この集団や社会は、人類のようにコミュニケーション手段としての言語や記号を発明し高度化複雑化していくことで巨大化することが可能に。

6

子育て共同体としての登場→集団・社会の拡大→巨大化と絆の喪失

●しかし、社会の巨大化、生活様式の変化等々 ⇒ 互酬的な協力関係が減り ⇒、信頼関係も希薄に⇒ ネットワーク（絆）も弱体化 ⇒ 今日直面している個人が集団や社会に適応できにくい問題に。

●互酬的な関係に基づく信頼関係の非常な劣化 ⇒ 今回のコロナ危機で一気に顕在化

●しかし一方で、し自分の周りの社会がそううまく互酬的な協力関係、信頼関係で繋がっているなど感じられない、むしろ、集団や社会は、逆に、個人にとって信頼できず、自分を抑圧するものと感じられぬ場合も多い。それらも含めてコロナ後の社会教育の課題として「橋渡し」や「足場掛け」をしながら「共通の土俵作り」としての社会教育の役割を考える必要。

7

ソーシャル・キャピタルへの注目

ソーシャル・キャピタルへの注目

●●米国では暫く前からコミュニティの衰退が進み、犯罪など様々な問題が増加する中で注目概念（日本で注目されるきっかけとなったのは、R.パットナム著、・集内蔵文訳『孤独なボウリング』柏書房が出てから）

●日本ではバブル崩壊後経済のグローバル化と新自由主義経済のもとで非正規雇用が増え（ニート問題）、追い打ちをかける東日本大震災等により、絆の喪失と日本社会の“無縁社会化（孤独死問題等）”に強い危機感 ⇒ 将来の展望が持てる仕事と共に私達の社会で大事な価値とはモノやお金では計れない豊かな付き合いの蓄積こそ価値ある資本、**ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）**。

8

ソーシャル・キャピタル ⇔ 住民活動（隣近所の付き合いも含めて）

●次の図表の上は、米国の政治学者で『孤独なボウリング』の中でソーシャル・キャピタルへの着目を促したR. パットナムが言ったことで、分かりやすく言えば、地域の協調性が高まる活動をみんなで楽しくやれば、これからの地域に大事な課題に誰もが当事者意識をもって向き合い、解決に努めるのに必要な信頼、規範、ネットワーク（絆）を培養するのに役立つ。

●下の図は内閣府経済社会総合研究所が出した『コミュニティ再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書』（平成17年8月）

●この研究の仮説は、ソーシャル・キャピタルが豊かならば ⇒ 住民活動への参加が促進される可能性が高く、また市民活動を活性化すれば ⇒ ソーシャル・キャピタルが豊かに培養される可能性高い。つまり、●両者の間に正の相関があることが実証されている（パットナム、その他）

9

ソーシャル・キャピタルの概念

ソーシャル・キャピタルの概念

ソーシャルキャピタルとは

●人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴



10

ソーシャル・キャピタル形成と社会教育ネットワークの組織化

●ソーシャル・キャピタルの蓄積がないと社会教育は難しい ⇒ 社会教育が活発な地域はソーシャル・キャピタルが豊か

●ソーシャル・キャピタルを豊かにする社会教育のポイント

●地域のネットワークの発掘・活用

（例）ある女性・・・①大塚町内のある商店の前の目撃者「おばあちゃん元気です」の貼り紙から、②高齢女性の見守り（ニーズの把握）、③地域ネットワークの活用 ⇒ 人柄・お節介、物事を考える時いつも「他者」のことが判断の材料に入っている ⇒ 多くのネットワークに属しながらも、それらの活動場になっっている ⇒ 共通する性格 ⇒ 地域コーディネーターに通じ

●ウィズコロナ後の地域社会教育計画 ⇒ 地域の“無縁社会化”を食い止めるソーシャル・キャピタルを蓄積するための「橋渡し」「足場掛け」を通して地域作りが「広場」や「土俵」をつくることとそれを抑える人の活動の場の「土俵」を「ソーシャル・キャピタル」の蓄積につながることを目的にも「自然的に地域において互酬的な関係づくりを展開している人材の発掘と活用が不可欠

11 社会教育の役割としての「橋渡し」

- ・孤立した住民や不活発になった団体、グループ・サークル等に「橋渡し」をし、さらにウィズコロナ時代の分断と格差の拡大等に関わる学習課題に、ソサエティ5.0やそれと一体的な関係にあるSDGsの高みを目指しながら社会教育としての「足場」を掛けていくこと。ただし「ソーシャル・キャピタル」の観点からも社会福祉の分野とは問題意識を共有できる経験とセンスを持つ社会教育関係者であり、そのための人材開発・養成が急務

14 健康寿命をつくる新しい生き方・「自助」と「共助」の力をつけること⇔それをサポートするのが社会教育の「公助」

- 私たちの願い = 健康で長生きすること = “Society5.0”が求める「健康寿命」 ⇒ 遠隔地や過疎地でもオンラインで高度医療が受診可能に ⇒ 健康診断の結果が自分で読め、必要な食生活の改善や規則的な運動の取入れ等に個人で（自助）、さらに仲間と一緒に（共助）取り組む = 間違いなく新しい前向きな生き方。
- 重要なポイント・・・これによって個人の健康寿命が延びるだけでなく、社会的コストが抑制され、少子高齢化と医療費増加の中でも私達の命綱である国民健康保険制度（公助）を「持続可能な制度」として維持できる。
- 新しい社会教育の学習課題・・・自助－共助－公助の適切な結びつき

12 新しい社会教育が忘れてならない視点 Society5.0やSDGsを活動に取り込む

- ・ 持続可能な未来化の推進・人づくり
- ・ 食料の増産やロス
- ・ ソーシャル・キャピタルの蓄積がないと社会教育はやりにくい
- ・ 遠隔地から「OHC」抽出
- ・ 高齢化に伴う社会コスト
- ・ 地域間の格差
- ・ Society5.0を支える技術
 - ・ AI
 - ・ ビッグデータ
 - ・ 5G
 - ・ ロボット
 - ・ ドローン
 - ・ 自動運転
 - ・ 仮想現実（VR）
 - ・ リアルタイム翻訳
 - ・ 拡張現実（AR）
- ・ Society5.0への政府の取り組み
 - ・ 社会サービスのスマート化
 - ・ ITを利用したコミュニティ社会の実現
 - ・ 多様な働き方の実現
 - ・ 都市－地方から地方活性化へ
 - ・ Society5.0を実現する人材育成
- ・ https://www.softbank.jp/biz/future_stride/entry/technology/20200706/

15 デジタル化①コロナ禍が示した“窮すれば通ず”

- 私達のこの交流会に先立って「コロナ禍を超える生涯学習推進」（20/11/14日本生涯教育学会政策研究フォーラム）がオンラインで開催。
- コロナ禍で働く現場でも、学びの場でもオンラインが一気に増加 ⇒ 社会のデジタル化⇒元に戻らず、社会を根本的に変える ⇒ 令和2年はコロナ禍とオンラインの年として記憶されるはず。
- 時間がかかると見られていたデジタル化の重い扉をコロナ禍は一気に開けた。
- 「教育は対面型がベスト」という常識、オンライン＝非対面型という常識 ⇒ その常識に挑戦するしかない
- なぜなら市も町も村も動きが止まってしまい、オンラインに対する従来の評価はともかく、それしかないから始めざるを得なかった。

13 ウィズコロナ時代の社会教育に求められる「新しさ」とは何か

- 「ウィズコロナ」の社会 ⇒ “3密”、社会的距離、マスク着用等々の感染リスクをコントロール、しかし同時に社会的接触を減らさず、コミュニケーションの質を落とさない「新しい生活様式」が必要 ⇒ ブレーキとアクセルを上手く効かせる新しい生き方 ⇒ ここで言う「新しさ」とは？ ⇒ 高齢者の場合 ⇒ 外出自粛は意識や行動の萎縮につながりがち ⇒ 運動不足、生活全体の不活発化 ⇒ 健康リスク要因に ⇒ 生活スタイルの“新しさ”とは“消極的ではなく前向きで知的で創造的な生き方を意味 ⇒ 単なる「長生き」から「健康寿命」に

16 デジタル化②つづきー「久留米オンライン公民館」の実践から

- ・ 「教育ではやはり対面型がいい」オンライン＝非対面型コミュニケーションと考えるだけでは画一的な捉え方。生涯教育学会オンラインフォーラムで発表があった「久留米オンライン公民館」ではみんなが集まるプラットフォームを作り、15分の組、30分の組、それ以上の組といった単位でワイワイしゃべったり、発表したり、呼びかけたり・・・、実に色々な活動が展開され、まさしく公民館。「持続可能な発展」に関する具体的な行動目標（SDGs）に取り組んでいるグループもある。5月以降すでに30回開催されているとか、参加者の総数も驚くほどとか。参加者にできるだけ現場のリアルな状況を伝えようとする現場感覚

17

デジタル化③ 光と闇…等質化する社会では「ローカルに考えグローバルに行動する」ことが大事

●感染者やその家族の個人情報などがネット上で拡散、感染者が二重三重の被害に苦しんだ例 ⇒ コロナ禍差別にはネット社会の負の部分の影を落とす ⇒ 「新しい生活様式」が求める「新しさ」とは ⇒ 差別の危険性への気づきと抑制も含む ⇒ 政治的経済的な不満が増し、それに乗じてネット上で分断や排除を煽る言動も勢い ⇒ グローバル化とデジタル化が進むウィズコロナ社会の生涯学習・社会教育の重要な学習課題 ⇒ 立場の違う人々や少数派の人達をも含めて、お互いを知る機会や場を提供すること ⇒ 「橋渡し」と共通の「土俵作り」

18

デジタル化④スマホは高齢者の「生活支援ツール」「生き甲斐ツール」に…生き甲斐格差を埋める

● 前回第5回基調講演で日本生涯教育学会会長の合田隆史宮城尚綱大学学長
● デジタル革命で世界が5Gに入る ⇒ 社会がネットにつながり、膨大なデータが高速かつ確実に瞬時に、沢山の利用者の間で同時に双方向でやりとりできる全く新しい時代に ⇒ 働き方、教育・文化、医療等々、社会が変わる。そして実際、コロナ禍で一気にデジタル化の重い扉が開いた。今後は、
● スマホは高齢者にとっても大事な「生活支援ツール」「生き甲斐ツール」に ⇒ そのためスマホやこれを使ってのLINEなどSNSの利用の学習は生涯学習・社会教育の喫緊の役割 ⇒ 大事なこと。高齢者の「生き甲斐格差」を埋めること

19

若い世代への「橋渡し」としての市民教育は社会教育の重要な課題…若い世代と学び合い「橋渡し」をする学習機会を

● 選挙権が18歳に引き下げられ、有権者目前の中高校生などの主権者教育（市民教育）の機会が絶対的に不足。● 従来学校教育も社会教育も取り組みは不十分 ⇒ 1,000兆円を超す天文学的な累積財政赤字はなぜ生じたか、私達の責任は何か、少子高齢化と膨張する社会保障費、高齢者の医療費の自己負担増問題、自分達の将来の年金は、いわゆるポピュリズム政治とは何か、負担を先延ばしにすると若い世代に何を意味するか等々
● より現実の問題、データに基づいて世代間で考える学習機会の必要が増しており、社会教育は世代間の「橋渡し」となる学習機会を提供する ⇒ 分断、対立でなく社会的責任を分かち合う「広場」をつくる社会教育を。

20

最後に:ゴリラ型社会からサル型社会化する私達の社会への危惧～社会教育への期待と共に

● 基調講演・・・社会がお互いに共鳴・共感しあいながら協力するゴリラ型社会ではなく、サル型社会、即ち強いリーダーが率いるグループが全体を威圧的に支配し食料を好きなだけ取ってしまう格差社会の特徴を示してきたことを憂慮。
● グローバル化がもたらした社会の多様性は、社会的な格差がさらに進み、私達が気づかない間に、コロナ禍などによって、私達の間に壁を作る方向にベクトルが働いてしまいかねないと山極先生は危惧される。確かに、社会的な一体感、連帯感などは、もう諦めるしかないほど分断が進まないように、私達の社会教育は、社会が目指すより高い共通の目標に「足場を掛け」、地域にある多種多様な団体・組織・サークル等に「橋渡し」をする。それは社会教育か社会福祉かを問わず協働して取り組むべき役割であると思う。

第2部

オープニング

【実行委員長

茨城大学名誉教授 菊池 龍三郎】



コロナ禍によって私たちはあらためて、人と人との結びつきが大切ということを痛感しました。消極的に生きるのではなく、コミュニケーションの質と量を落とさず、生きがいを持って、人と関わりながら生きる大切さを伝える役割が「社会教育」であり、新しい課題であります。

「人々をつなぎ、そこに絆を生み出すのは何だろうか？」。

本大会で撒いた種から育った芽を、ぜひ皆様の所で育てて頂いて、今後の実践交流会で、皆様とともに披露し合いたいと願っております。

【茨城県教育委員会教育長 小泉 元伸】

本大会は、茨城から東日本の生涯学習・社会教育のムーブメントを起こそうと、平成27年に第1回交流会が開催され、毎年実施しています。

第6回大会に当たる今回は、新型コロナウイルス感染症への対応で新しい生活様式が求められている現在、生涯学習・社会教育の分野で何ができるかを考える場を提供し、今後の実践に活かすことを目的としています。

本大会を通じて、ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育のあり方について考える機会となり、今後の実践に活かしていくことを祈念しております。



【国立教育政策研究所

社会教育実践研究センター長 上田 浩士 様】



わが国は少子化による人口減少の局面に入るとともに、超スマート社会 Society 5.0 の実現に向けて急速に変化する中で、新しい時代の生涯学習を振興していくことが期待されております。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面で行う事業の縮小など社会教育活動について制限を強いられている現状があると思います。

皆様には、今回の「オンデマンドによる配信」という新しい形での学びを次のステップへの一助として頂くことをご期待申し上げます。

パネルディスカッション 「新型コロナウイルス対応の実際」

進行：茨城県水戸教育事務所 主任社会教育主事 松崎 英政

参 加 者



コーディネーター

【藤枝 智昭 氏】（報道関係者）

・茨城新聞社編集局論説委員室 論説委員長



パネリスト

【白川 洋子 氏】（医療・看護関係者）

・公益社団法人茨城県看護協会 会長



パネリスト

【松尾 好明 氏】（社会福祉関係者）

・つくばみらい市社会福祉協議会地域福祉推進課 課長



パネリスト

【忠 文夫 氏】（飲食業関係者）

・水戸市泉町仲通り商店会 会長

I 「それぞれの現場の現状や課題」



これから、パネリストの皆さんとともに「新型コロナウイルス対応の実際」をテーマに、新たな生活の在り方などについてパネルディスカッションをしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、早速、一つ目の話題に入りたいと思います。新型コロナウイルスの世界的な感染拡大が始まって、すでに1年近く経ちますが、それぞれの現場の現状や対応についてお聞かせいただきたいと思います。まず、白川さん、お願いいたします。

停泊中のダイヤモンドプリンセス号への看護職派遣の依頼が厚生省から水面下であったことがありました。予測しなかったことで戸惑ってしまいました。正確な情報を得ることができず、困難な状態がしばらく続きました。その後、看護協会として何をしなければならぬのかを考え、「どうすることが今後予測されるのか」「どうすることで我々看護師、看護職が働くことができるのか」「協会の持てる力とは何なのか」などについて検討し、感染者が出た病院にヒアリングに行き、現場の話を聞いてきました。この混乱期を第1期と名付けました。

第2期においては、活動指針の決定を行いました。「看護職の声を聞き、行政に届けること」「軽傷者対応のホテルに看護職を派遣して、健康管理を行うこと」「医療従事者対象に感染予防の研修を実施すること」「協会にウイルスを持ち込ませないためのマニュアルを作成すること」です。当協会は、研修のために多くの人々が訪れるので、クラスターが発生しては大変になるということで、マニュアルを作成して実行しました。それから、協会事業を安全に行うための必要な資材を購入しました。



現時点は、第3期と呼んでいるのですが、ワクチン接種のため、県、市町村、医師会等の団体との協力体制構築の入口に入ったところです。



医療現場の方は、非常にご苦労されていると思います。それが、ひしひしと伝わってきました。ありがとうございます。続いて松尾さん、社会福祉の現場の現状などについてお話しください。

つくばみらい市の社協としての新型コロナウイルスへの対応ですが、公共施設が臨時休館となってしまう、地域住民の方と一緒に活動しているサロンであるとか、通いの場であるとか、集いの場、そういうものが、ほとんど中止になってしまいました。

ボランティア活動も、一時的に休止をせざるを得ない状況でしたが、障害者や高齢者の方の病院への移送サービスなど、どうしても休止できないものに関しては、事業を継続してきました。

そこで、コロナ禍により形を変えながら取り組んだことを二つ紹介します。一つ目は、高齢者へ無料のお弁当の配付です。従来は、ボランティアが作ったお弁当を無料で高齢者の方に配っていました。しかし、コロナ禍において、お弁当を作ることができなくなってしまったので、市内の飲食店さんが作ったお弁当を社会福祉協議会が買い取り、高齢者に配るというような形に一時的に変えました。



二つ目です。市内には、大相撲の立浪部屋があります。そこからいただいた生地を活用して、ボランティアがマスクを作って、市内の幼稚園や保育所にマスクを配るような活動も行いました。



人と人が会うことがはばかれる中で、活動を続けるというのは難しさがあると、よくわかりました。ありがとうございました。それでは、忠さん、お願いいたします。

年末に、私のところにママさんが来て、何名も廃業すると涙をこぼしていました。長い人は18年やっていましたが、お店の人件費と家賃だけでなく、自分の生活費を支払わなければならないので、もちこたえられないとのことでした。飲食店への協力金は、前より多く出ているのですけれど、一年かけてこういう状態ですから厳しいです。

今、私は絵を描いて、ネット上や知り合いのお客様にその絵を買っていただいております。そこで得たお金でお米を買い、食事をするのが大変な子どもたちを対象に、子どもの絵とお米を交換し、子どもたちの絵を展示する展覧会を開催しようと思っております。また、この活動を5年は続けていきたいと考えています。

言葉だけでなく、今日からでも明日からでも、みなさんで行動しないとダメです。自分が行動すれば、1人でも喜ぶし、幸せにつながる。みなさん、行動しましょう。

現在の状況で一番大変なのは子どもです。学校に行くにしても、食事をしないと勉強もままならないと思うのです。我々大人は真剣に、子どもを助けることが役目だと思います。

今後もネットやテレビなどで発信をしながら、1人でも多くの子どもが幸せになるように努力していきたいと思えます。覚悟を決めて、やるつもりです。



ありがとうございます。本当に、このコロナ禍というのは、様々な分野に苦境を敷いていると思います。その中でも貧困はやはり大きな問題であると私も感じています。取材をしていると、今日、明日の食べ物に困っている方々が増えている。雇い止めであったり、解雇であったり、そういったものから貧困に陥って、子供たちに食べ物を与えることもできないという方がたくさんいます。コロナ禍の中で、貧困の問題というのは、忠さんがおっしゃったように行動していかなければならない問題だと感じています。ありがとうございました。

Ⅱ「新型コロナウイルスへの対応をしていく中で見えてきた変化や課題」



続いて、二つ目の話題に入ろうと思います。新型コロナウイルスへの対応をする中で、それぞれの分野で様々な変化や課題が出ていると思うのですが、どういったものがありますか。忠さんからお願いします。

皆さんもご存じのとおり、飲食店への営業時間短縮の要請が挙げられます。今までは、夕方5～6時頃に開店して、夜2～3時まで営業していました。それが、今は、午後3～4時に店を開けて、夜8時に閉めるという状態です。そういう時に開けたことがないものですから、お客さんが1人も来ません。しかし、お店を経営している方はお店を開けてないと不安なのです。コロナだろうが、大地震だろうが、経営者の皆さんは必ずお店に来るのです。不安で不安でしょうがないと思います。これから、どういう感じで進めようかと。その答えは、今のところ誰も出ていないのではないのでしょうか。お店がつぶれないでいること、皆さん考えているのは、それだけじゃないですかね。



時短営業の要請というのは、かなりダメージが大きいですか。

ものすごく大きいダメージがありますね。お店を空けている時間、お客さんは、会社でお仕事をしているわけですから、来ることができません。お店を開けていてもお客さんが来ないので、我々は不安なのです。



飲食店が元気を失ってしまうと、それに連なって、食材を提供する農家であったり、卸問屋さんであったり、様々なところに影響が大きくなると思います。だから、飲食店を応援するということは、茨城の食を守ることではないかと思っているのですが、いかがですか。

おっしゃるとおりです。後輩が農業をしております、白菜やキャベツなどを私の店に何十箱と持ってきてくれたことがありました。お客さんがいないから使い道がないということなのです。だから、私はいただいた野菜を使って、おしんこを作って皆さんに無料で配っています。

ここまで話していいかわかりませんが、私の知り合いで命を落とした人もいますね。だから真剣に行動していかないといけないと思っています。現実にはすごいことが起きている感じがします。



本当に、何と言ったらいいのか。「苦しい」という言葉では言い表せないような状況だと思うのですが、何とかみんなで応援したいと思います。それでは、続いて松尾さん、福祉の現場ではどうでしょうか。何か大きな変化とか成果とか課題とかありましたでしょうか。

コロナの中でも必要とされる事業は、地域のボランティアの皆さんや地域で活動されている協力者の皆さんとともに、新しいものを作っていかなければならないと考えています。

まず、「ちょこっと、買い物ツアー」です。75歳以上の方で、車をもっていない、免許を返納した、自宅から500m以内に生鮮食品を扱うお店がない方が対象です。社協の公用車をボランティアさんが運転して迎えに行き、市内のお店に買い物に行くという事業です。高齢者の方にはコロナを気にして、外に出るのがちょっと怖いという方もいらっしゃる。社協で声がけをして、なるべく外に行けるようにしています。



次は「子ども食堂」です。地域交流の場ということも含めているので、「地域食堂」という意味合いもあると思っています。本来であれば会食がいいのですが、この状況ですので、形を変え、テイクアウト方式でお配りするという活動にしています。市内5か所で行うようになりました。

「子育て応援弁当」というものも、月2回ほど行っております。生活困窮の方や困っている家庭のお子さんのいる世帯に対して、社協の職員と専門職の職員等で、夕御飯としてのお弁当を配りに行くものです。その際に、家庭の様子を聞いたり、相談を受け付けたりもしています。

ボランティアさんと一緒にこのような事業を進めています。



ありがとうございます。福祉の現場でも一番大きな課題は、食の確保なのでしょうか。

その通りです。コロナの影響で、生活が困窮している方が増えているというのは事実で、「食の確保」は、かなり大変な問題だと思います。

「子ども食堂」ですが、全額補助できるわけではありません。広報紙等を通して、市民の皆様から家庭で余っているものなどを寄付という形で食材を集め、事業を展開しています。本年度、広報を出したところ約 300 k g のお米が届きました。市民の皆様からそういう形でご協力いただいております。



以前から、貧困の拡大によって、食事を十分にとれない子どもたちが増えているという問題がありましたが、コロナにより、その問題が顕在化したように思います。茨城でも、フードバンクに頼る方が増えているとのことですので、「食の確保」の問題は、支援の輪を広げていかなくてはならないと思います。ありがとうございました。

それでは、白川さん、医療・看護の現場はいかがでしょう。

茨城県は、医療・看護関係の人材が不足しております。看護職の就業者は約3万人いますが、潜在看護師はその何倍もいます。一旦辞めると、なかなか復帰しないという現状であり、コロナ禍において、それが顕在化しました。

そうは言っても、コロナを食い止めてくなくてはいけないので、県の医師会と連携して、感染予防の知識・技術を身に付けるための研修会を実施しました。その結果、コロナに対応するための訓練をしなければならない医療・看護関係者がたくさんおり、技術的なことに関して差があるということもわかりました。県民の方の安心・安全のためにも、地域一丸となって、医療チームを作ってやらなくてはいけないと思っています。

そして、人材確保を予測的に図らなければなりません。看護協会では、潜在看護師の発掘を行ったところ、16名の方が手を挙げてくださり、軽症者が宿泊するホテルで健康管理や電話相談を行っていただきました。今後、ワクチン接種も始まりますので、さらに人材を確保しなくてはいけないと思っています。

また、研修についてですが、今までのように対面ではなくオンラインに変えたところ、ICT 機器に慣れていない方もおり、非常に苦労しました。そして、若い方と熟年の方では ICT 機器に関する知識に格差があるということがわかりました。それでも、茨城県だけでなく、日本中がオンラインにシフトしていかなければならないと思っていますので、そういうところに今後も力を入れていきたいと思っています。

それから、ワクチン接種に関しては、日本中総動員で協力しなければいけないと思っていますので、他の職業の方、仕事が休みの方、仕事がないという方にもお手伝いしていただきながら対応していけたらと思っています。



やはり、医師や看護師の確保や偏在の解消など、人材の部分が課題になっています。大きな災害がきたときに、このような課題が、一気に顕在化してしまう危険性を孕んでいることがはっきりしたと思います。潜在看護師の方の発掘や研修などを通して学んでいただくことの大切さを感じました。

また、保健所の充実を考えなければいけないと思います。保健所の統廃合が進んだその矢先にコロナ禍が起きて、保健所の方々が大変な思いをされています。たとえ、コロナが終わっても新たな感染症の発生は考えられるわけですから、それに備えるためにも重要なのではないかと思います。ありがとうございました。

Ⅲ「これからの人と人とのつながり方・「生涯にわたって学ぶ」ことの意味、人づくりや地域づくりの進め方」



新型コロナウイルスは、私たちの生活や人と人とのつながり方を大きく変えました。また、「生涯にわたって学ぶ」という意味を問うことになったと思います。今後、人と人はどうやってつながり、そして「生涯にわたって学ぶ」という意味はどういうことなのか、さらに、どうやって人づくりや地域づくりを進めていけばよいのか、お話を聞きたいと思っています。白川さんからお願いします。

非常に難しいテーマですね。これが分かれば、何も苦労しないと思います。

私は、フィジカル的な命も非常に大事なのですが、生きていくための「社会的命」「心の命」がすごく大事だと思っています。WHOの健康の定義は、「健康とは身体的、精神的、社会的に良好な状態であり、単に疾病のない状態で、病弱でないことではない。」です。やはり、人々が社会参加をし、生きがいを持っていることが重要だと思います。

それから、今後も看護師の人材不足は課題になると思います。そこで、看護師が対面だけではなく、ICTを使って事前に健康情報を得てから、訪問看護に行くなど効率性を高めることが重要です。

茨城県は歴史が深いです。歴史が深いと人は重くなり、機動性を低めて、変わることへの脅威を助長します。このコロナは不幸ではあるのですが、これをバネにして変わることへの原動力になると思います。ただ、それを実行していくためには、創造性がないといけませんし、異質なものと仲良くなる必要があります。

また、まちづくりについてですが、行政の方には、ぜひ、まちの中に「人と知り合える場所」を作りたいと思います。様々な人が近くに座っている光景のあるまちづくりです。これからの超少子高齢化社会において、社会に参加できるようなまちづくりをしていただきたいと思います。



まさにその通りだと思います。このコロナで、「人は一人では生きていけない」ということがはっきりわかったと思います。やはり、人と人がつながっていかなければ人は生きていけない。そのために、新しいやり方を考えていくことがやはり課題なのではないかと思います。それでは、松尾さんよろしくお願いします。

地域のつながりとか、人づくりとか、仲間づくりということを考えていくのが、社会福祉協議会だと考えています。これは、ウイズコロナとかポストコロナ時代に限らず、社協が行っていかなければならない仕事だと考えています。コロナ禍にあっても、ボランティアや地域で活動してきた方などと、これまで築いてきた絆は、これからも大切にしていかなければならないと思っています。コロナにより、その地域で培い支え合いつながり合ってきたことを再確認できたところですが、新たなスタートを切っていく必要もあると思っています。

例えば、ボランティア連絡協議会に加盟している団体の役員は高齢者が多く、スマートフォンを使うのが苦手な方もいらっしゃると思います。そこで、LINE講座を行い、ボランティア連絡協議会のグループLINEを作りました。そのような対応を少しずつ行い、それが地域のボランティアへ広がっていけばよいと思っています。

また、スマートフォンが得意な高校生や大学生をボランティアで募集していくとか、業者や商店、企業や学校も含めて、様々な活動をしている団体とのネットワークを新たに作っていく必要があると思います。今までなかったつながりをつくり出していくことで、新たな何かが生まれる可能性があると考えています。



コロナになって、社協の存在意義とか重要性というのが、はっきりしてきた気がします。これから社協の役割が、もっと何か重みを増していくと思います。いろいろな活動を期待したいと思います。それでは最後に、忠さん、お願いします。

私は、「何を言われてもいい。自分の言っていることは間違っていない。よい方向に進めるんだ。誰かに任せるのでなくて、自分がやるんだ。」という意思をもちながら行動しています。

この前、聞いた話では、あるご家庭では、マスクを買えずに、お母さんが洗って繰り返し使っているそうです。小さい子や小学生は、親が不安だと、自分も不安でどうしようもないのです。だから、私は、「幸せ」とか「いい思い」を届けたいのです。苦しいことばかりではなくて、楽しいこともたくさんあることを知らせたいのです。

生きているうちに何を残していけるか、それは、これからの子どもに、我々ができることを無我夢中でやることです。それに尽きます。



ありがとうございます。「自分がやるんだ。」という力強い言葉に感銘を受けました。子どもたちの幸せというのは、大人がしっかり行動して、子どもたちの幸せを確保してかなければならないのだと思いました。

IV 「まとめ」



「新型コロナウイルス対応の実際」をテーマに、医療・看護、社会福祉、飲食業の方々をパネリストにお迎えして話を進めて参りました。ワクチン接種がもうじき始まるようですが、コロナ禍は、まだまだ続くことを覚悟しなければなりません。そうした中、今回のパネルディスカッションでは、パネリストの方たちのお話から、それぞれの分野で工夫して、対応に取り組まれていることがよくわかりました。

コロナ禍は、私たちの生活を一変させました。人と人が会うことや外出が制限され、多くの人が孤立感を深め、「人は一人では生きていけない」ということを改めて知ることになりました。コロナと共存・共生することが求められている中で、どうやって人と人がつながり、よりよい地域社会をつくっていくかは、大きな課題であると思います。今回の集まりは生涯学習・社会教育実践研究交流会ということですが、これからの生涯学習で「学ぶ」ということは、これまで身に付けてきた知識や経験をいかに社会に還元していくかが、重要なのではないかと思います。実践を通して、新たな人とのつながり方を探っていくことが求められているように思います。

また、生活に困窮する人たちや、仕事を失った人たちがたくさんいます。そうした人たちへの支援などを通して、「新たな学びの在り方」や生活を築き、人づくりや地域づくりに生かしていくことが重要だと思います。

新たなコミュニケーションのあり方を模索しながら、互いに助け合う社会を築き、人とのつながりを深め、幸せな社会を築いていくことが、今後の大きな課題になってくると思います。

最後になりましたが、本日はパネリストの皆様、ありがとうございました。

『パネルディスカッション編集を終えて』

パネルディスカッションの議事録や様子を録画したデータをいただき、編集作業を終えたのは、令和3年2月の20日頃。1月半ばに出された緊急事態宣言は、感染者数が減少して解除も見えてきたところですが、もうちょっと続きそうです。思えば、令和3年の始まりは、いつもと違い、コロナ終息への期待と今年もコロナが続くのかという不安の入り混じった気持ちで迎えたような気がします。そして、外出時のマスク着用が当たり前になり、ここ1年で習慣としてすっかり身に付いてしまいました。

何をするにも新型コロナウイルス感染症の感染状況に左右され、考えて行動しなければならない中、今回の編集作業を通して、困難を抱える方が増えていること、そのような人々を支えるため、あるいはコロナの感染防止に向け、新しい手だてを考え、取り組んでいこうとする様々な立場の方々の思いや考えに触れることができました。ただ、やはり、コーディネーターの方やパネリストの方々と時間・場を同じくして、生の声でのやり取りを聞きたかったです。そんなことが、また当たり前のようにできる時が早く来てほしいです。

広報部会 井上 一宏（県北・常陸太田市）

『シンポジウム編集を終えて』

シンポジウムでは、様々な立場の方が最前線で得体の知れないウイルスに立ち向かう様子がひしひしと伝わってきました。私なんて昨年の5月頃は弱気で「何もできないし、仕方がない」という言い訳の思いしかなかったような気がします。でも、シンポジストの皆さんは「どう立ち向かえるのか、何ができるか」を仲間としっかり考えて実践して形にして継続できるように取り組んでいます。この困難な状況にも関わらず、前向きでたくましく進めるその原動力はなんなのでしょうか？

澤さんがシンポジウムの中で「今、不要不急な行動は自粛するように言われています。朗読・読み聞かせ活動は、不急ではないかもしれませんが、不要なものではないと思います。今はまだ自粛の時です。いつかまた活動ができる、そんな希望を皆さんが持てるように心がけていきたいと思います。」とおっしゃっています。私はこの言葉に感銘を受け、目が覚めました。茂木館長の「きりがない」ほどのいくつかの壁（課題）を乗り越えようとするバイタリティーと高島先生の学びの歩みを止めない！「とりあえずやってみよう」とするチャレンジ精神等々の熱い思いが、このコロナ禍のゴールの見えない闇の中に、一筋の光となって輝いているように思えます。

さあ新しい時代の2年目に突入します。皆さん、力を合わせて一緒に乗り越えていきましょう。

広報部会 海老原 淳（県西・常総市）

シンポジウム

「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性」

～趣旨～

「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性」をテーマに、立場が異なる公民館職員、図書館関係者、社会教育行政職員など最前線の現場で立ち向かっている関係者がコロナ禍での取り組みやそこで浮き彫りになった課題について発表し合い、討論する様子を傾聴することで、新しい時代の変化に対応しながら生涯学習・社会教育の歩みを進めていくヒントを学ぶことを目的としている。

シンポジスト

前橋市桂萱（かいがや）公民館 館長

茂木 勇 氏



シンポジスト

茨城県立図書館 朗読・読み聞かせ講師

澤 則子 氏



シンポジスト

桜川市教育委員会生涯学習課 社会教育主事

高島 誠 氏



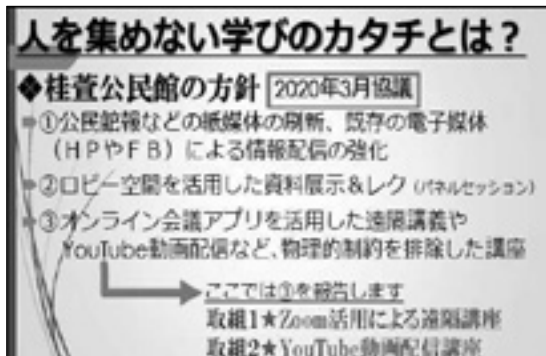
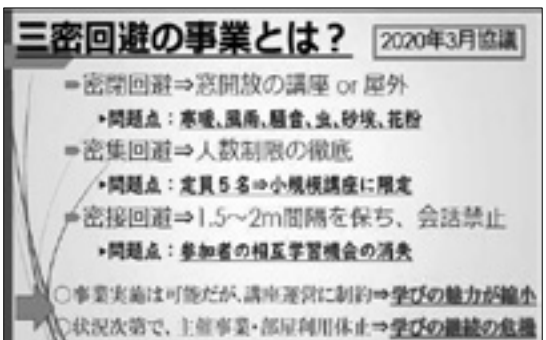
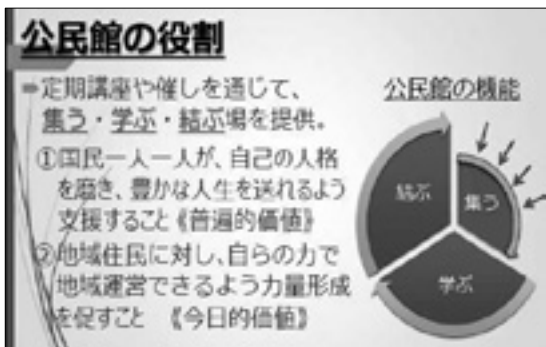
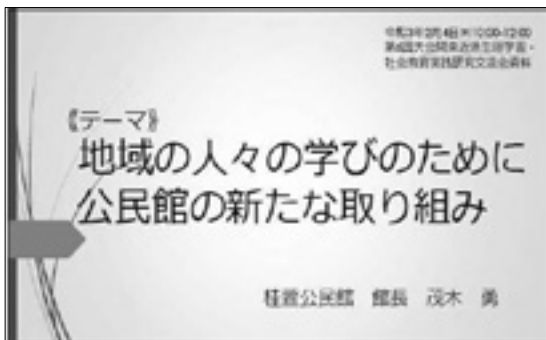
コーディネーター

茨城県教育庁総務企画部生涯学習課
主任社会教育主事

山崎 英男



進行：茨城県県南教育事務所 主任社会教育主事 荒井 克彦



「地域の人々の学びのために、公民館の新たな取り組み」をテーマにお話をさせていただきたいと思います。

まず、前橋市の公民館が、どのような仕組みなのかをご存知ない方もいらっしゃると思いますのでお話しさせていただきます。前橋市の公民館は、サービスセンター兼務の公民館が11、単独の公民館が5、合わせて16となっております。

公民館の役割は、講座や催し物を通じて、集う・学ぶ・結ぶであるとよく言われております。まず集って、いろいろなことを見たり聞いたり学んだり、お互い教え合ったりしながら人間関係を形成し、それを地域に持ち帰って水平展開していくような、集う・学ぶ・結ぶです。それがコロナの関係で、集う機能が極端に制限されてしまう状況になりました。

2020年3月は、3密という言葉が流行り始めた時期だと思います。密閉・密集・密接は、市民生活の中で回避していくということで、公民館でも3密を回避して事業を行わないといけないという話になりました。

職員ともいろいろ話し合い、密閉回避のためには、窓を開けたり、屋外でやったりすればよいかとか、密集回避のためには、人数を制限しようとか、密接回避のためには、1.5〜2mぐらいの間隔を開けようとか、そのような話をしておりました。

話し合うことで、わかった点は、事業の実施は可能けれども、非常に制約を受け、学びの魅力が、縮小してしまうだろうということです。特に密接回避により、お互いが教え合ったり、意見交換したりとかがなかったら、学びの魅力は縮小してしまいます。

また、感染状況が拡大していくと、主催事業や部屋利用が休止になり、学びの継続が危機的状況になるということです。

そこで、桂萱公民館では、人を集めない学びの形を考えたらよいのではないかとということで、三つの方針を立てました。

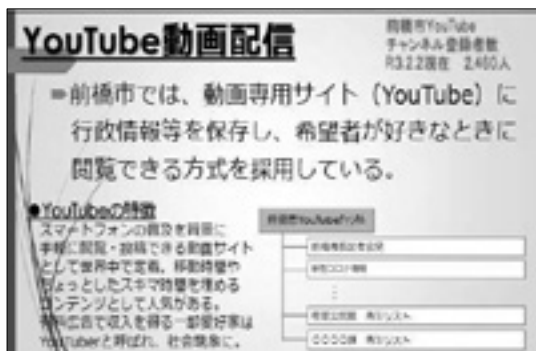
一つ目は、公民館報とか、フェイスブック、ホームページといった媒体による情報発信の強化をしていくこと。

二つ目は、ロビーで、パネルとかを展示して、そこでレクチャーをするというパネルセッションのようなものを、行っていくこと。

三つ目は、オンライン会議アプリを活用した遠隔講義やYouTubeで物理的制約を排除した講座を行っていくこと。

桂萱公民館で取り組んでいることの一つとして、Zoomの導入があります。

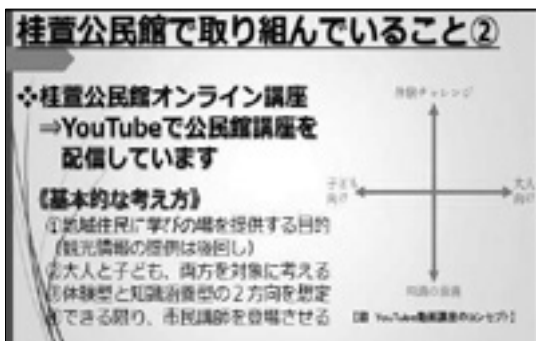
2020年の6月には、試行段階に入りました。実行委員会方式を取っている子育て親子支援事業は、公募で選ばれた運営委員のママさんたちと一緒に企画内容を検討しているのですが、コロナの影響もあり、Zoomで会議をしました。ママさんは3人いるのですが、そのうちZoomの経験者は1人だけでした。そこで、アプリ取得から始めて、3人と職員とで計3回、Zoomの会議を行いました。子育て世代は、スマホの操作にすぐ慣れているので、Zoomの会議に、すぐ順応しました。ママさんからは、Zoomを支持する声があったので9月からの講座はZoomを取り入れました。



もう一つは、ユーチューブの動画配信です。前橋市のユーチューブチャンネルの登録者数は、2460人（R3.2.2現在）です。1年前は、1500人ぐらいだったので、1年間で約1000人増えていきます。前橋市の行政情報等を、希望者が好きな時に閲覧できる方式を採用しております。

桂萱公民館では、ユーチューブでオンライン講座を配信しています。

基本的な考え方は、①学びの場を提供、②大人と子どもの両方が対象、③体験型と知識寛容型の2方向を想定、④できる限り市民講師を登場させる、の四つです。

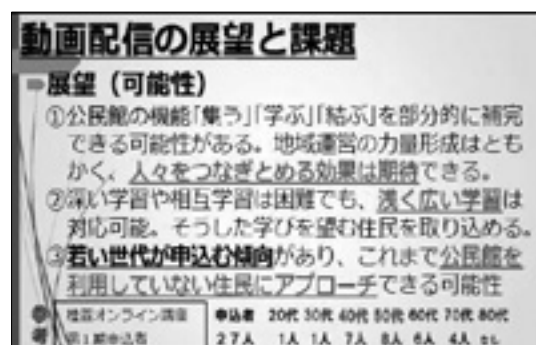


具体的な事例ですが、中南米料理を学ぼうという講座では、地域の飲食店のオーナーさんに講師になってもらいました。ディレクターやカメラマンは、みんな素人ですが、カメラの角度を変えたり照明の明るさを調節したりと工夫して撮影をしました。

いろいろなお店で交渉、撮影をして、地元有名店の味を学ぶ講座、桂萱キッチンゼミができました。6月11日には、配信を開始しました。動画は、長いものもあるのですが、皆さんの集中力を維持するために15分程度にしています。



動画作成上の留意点ですが、我々が行っているのは公民館講座であり、笑いを取るのが目的ではないので、演出は控え目にしています。それから、著作権の取り扱いに注意をしており、講師から同意書をいただいています。また、著作権の二次利用は、回避するようにしたり、他の人の著作物が入り込まないようにしたりしています。さらに、音源は動画ソフトについている音源か、無料の音源を使用しています。そのようにして、動画作成を行い、今、ユーチューブには、25の動画コンテンツがあります。



茂木館長ありがとうございます。コロナ禍で三密を防ぐ必要がある中、オンライン会議であったり、ユーチューブ配信であったりと、様々な工夫がされていました。職員の方は、映像の素人にも関わらず、カメラアングルや照明などにこだわっていて、チャレンジしている姿勢がすごく伝わってきました。

課題も多くあるということですが、チャレンジしたことにより、若い世代の獲得という将来への展望がみられたのは、すばらしいと思いました。

課題を挙げるときりがありません。Wi-Fiを導入してもらうのにどれだけ時間がかかったことかわかりません。あと、問題なのが、講師依頼の難しさです。SNS上に自分の映像が残ることに対する拒否反応は大きく、「顔出しは勘弁」という方が多いです。

また、相互学習ができないというのは、オンライン講座の限界かなという感じがします。さらに、受講した方にどのような学習効果があったのかの測定が難しいという点もあります。あと、よく言われるのは、ICT環境のない高齢者世帯への配慮はどうするのかということです。

一方で、展望もあります。公民館事業を止めないで済むというのは、人々をつなぎとめる効果があると期待しています。また、深い学習とか相互学習は無理であっても、浅く広い学習であればできると思います。

それから、若い世代が申し込みをする傾向があります。これまで公民館を利用してこなかった住民にアプローチすることができるということです。

こういった方を繋ぎとめておけば、ゆくゆくはコアな利用者になっていくと思われるので、これからも動画配信に取り組んでいきたいと思っています。

コロナ禍における 読み聞かせ活動のあり方

～人とのかかわることの大切さ～



茨城県立図書館 朗読・読み聞かせ講師
荒井 真子

新型コロナウイルス感染が発症

- ・現場は、関係機関によって対応が様々だった
- ①茨城県立図書館の朗読・読み聞かせ講座は延期
- ②ある生涯学習センターでは、70歳以上は活動中止
- ③民間企業の朗読・読み聞かせ講座は開催

読み聞かせの講師として感じたこと

- ・政府が示す自粛活動
朗読・読み聞かせの文言がなく、
どうすればよいかわる
- ・朗読・読み聞かせは、声を出す 飛沫も心配
- ・初めてマスク着用 違和感
やっけないのか 迷い 不安



読み聞かせ講座
9/22 ゆき図書館



朗読講座
10/1 日立市立南部図書館

私が配慮したこと

- ・出来るものと出来ないものを把握
大きな声を出す、発声練習 ×
グループワーク ×
ハイタッチ ×
- ・口の周りの筋肉を動かす
滑舌練習 早口言葉で遊ぶ
- ・接触のないコミュニケーションゲーム
1対全員 2人ペア



「コロナ禍における読み聞かせ活動のあり方」と題して、発表させていただきます。このコロナ禍で、改めて人と関わることが、生涯学習の現場で大切だなというのを感じています。

新型コロナウイルスが発症したのは、ちょうど1年前になります。感染が見つかった時、読み聞かせ講座は、飛沫が心配される状況でしたので、どうすればよいか対応に困りました。特に困ったのは、各機関によって対応が違ったことです。茨城県立図書館の講座は、遠くからも参加する方がいらっしゃる講座ですが、残念ながら延期もしくは中止という形になりました。また、県内のある生涯学習センターでは、70歳以上は活動中止という措置になりました。一方で、カルチャーセンターなどの民間企業の講座は、開催されていました。このように対応がそれぞれ異なっていました。

私が感じたのは、このような状況で、朗読を行ってよいのかということです。なぜなら、飛沫が感染原因とされていたからです。加えて、朗読とか読み聞かせの講座を受講する方々は、中高年が多かったからです。

当初は、迷いや不安、違和感を感じながら行っていました。参加する皆さんも同様だったと思います。

そして3月に緊急事態宣言が出され、活動が全面中止になりました。このときの講師の立場としての正直な気持ちはほっとしたということです。

しかし、活動中止が続いて、今度はこのような声が聞こえてきました。講座がなくなり残念とか、ボランティアが生きがかったのに、できないのは寂しいとか、今日私は誰とも会話してませんかです。その一方で、活動したいけれど、感染したら心配だ、というような声も寄せられました。

感染が一旦収まってきた時期に、研修講座がいよいよ再開されることになりました。図書館の方々は感染予防対策を考えてくださいました。いつもは会議室を使うところ、ホールという広いスペースを使いました。また、参加人数の制限、会場の換気、隣の人との距離、入場前の体温測定、手のアルコール消毒、マスク着用などにも気を配りました。今では当たり前ですが、この時は、誰もがまだ不安の真った中でしたので、少しでも安心してもらうという意味でも必要だったと思っています。

講師の立場として、配慮したのが、研修内容の工夫でした。今までのプログラムでは、できるものとできないものがありました。朗読は、相手に声が届くように、発声練習をしなければいけないのですが、飛沫の感染が心配なので、大きな声は出せません。

私は、参加者が楽しく学べるように、必ずコミュニケーションを取り入れているのですが、握手をしたり、たくさんの方で行うコミュニケーションのゲームをしたりすることができません。

それではどうしたらよいだろうかということで、発声練習はやめて、口の周りの筋肉を動かす滑舌練習にしました。マスクしていると、もごもごして聞きにくい方もいらっしゃるの、聞きやすい話し方にするために、早口言葉で遊びました。また、接触のないコミュニケーションゲームは、私対全体とか2人ペアで行いました。



特に配慮したこと

自然に笑顔になるように工夫



みなさん、いつのまにか
笑顔



・読んで伝える表現力が
アップした！

・今まで以上に、読む
楽しみを実感した！

感じた課題

・活動制限が続く...

心のストレスを抱えている人が多かった
→どう解決？

・オンライン...

オンラインを活用できない人
オンライン環境が整っていない人もいる

活動の場を作る時の

キーワード

主催者、参加者の安心感

人とのかかわりがもたらす影響は大きい

- いつか収束して、「また活動ができる」
希望を持てるような運営を心がけたい



澤さん、ありがとうございます。朗読・読み聞かせは、飛沫が出るので、徹底的な感染予防をして、実施してきたことがよく分かりました。

また、この時間だけでも楽しい気持ちになってもらいたいということからコミュニケーションゲームを取り入れているということ、すごく心に響きました。

今の時代メールやラインなど文章で表現する機会が多い中、声でどう表現するかを学べるのが、朗読・読み聞かせだと思います。



接触のないコミュニケーションゲームとして、私と全員で負けじゃんけんをしました。私が出したのを見て、わざと負けるものを出すじゃんけんゲームです。これは、見てから出さないと、ゲームにならないのですが、ほとんどの方は一緒に出してしまいます。そこで笑いが起きて、盛り上がりました。

もう一つが、エアキャッチボールです。自分と離れたところに座っている人とペアになり、相手と無言で重かったら重いようなジェスチャーをしながらエアキャッチボールをします。

なぜ、コミュニケーションゲームを取り入れるかという、この時間だけでも楽しい気持ちになってもらいたいと思ったからです。だから、自然に笑顔になるように工夫しました。すると、予想しなかったことが起きました。朗読・読み聞かせは、相手に言葉を届けるコミュニケーション行動なのですが、制限があるせいか、いつもより伝えたい気持ちが大きくなったのです。研修の大きな目標、読んで伝える表現力に、いつもの研修より手応えを感じました。

実際の参加者の感想では、久しぶりに声を出して気持ちよかったとか、講座が中止にならなくてよかったとか、老人会で朗読したいとかがありました。本当に皆さん待っていてくれたのだな、ありがたいなと感じました。

ただ、課題も見えてきました。講座にいらっしゃる方は、どこにも行けない、誰とも話せないという、心のストレスを抱えている人が多かったのです。解決する方法としては、世間ではオンラインを推奨しています。朗読講座も、ズームを使ってやってみました。画面越しでも人と関わる満足感がありました。しかし、オンライン環境が整っていない人が多いのが事実です。大学生でさえ、この課題があります。講座で関わる高齢者層の方にとって、オンライン推奨の一言では済まないと思っています。

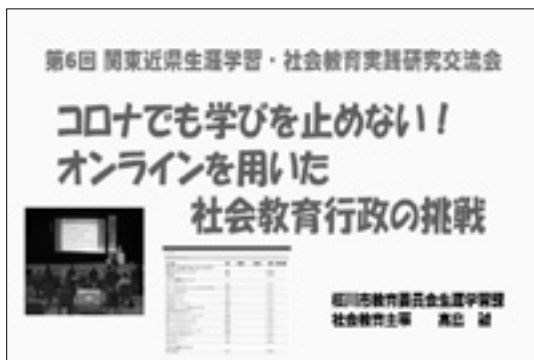
今、人との関わりが、簡単にはできないので、人との関わりが人生にとって大切だと感じていると思います。

残念ながら、コロナ禍は続きます。しかし、人との関わりは、生きていく上で大きな効果があると思います。そうであれば、国や行政から活動中止が出ていないときには、今の状況でできることを、知恵を出して工夫して、活動の場を提示していけたらと思います。

ただし、そのためには、徹底的な感染予防対策はもちろんですが、主催者側だけではなく、参加する方々にも、予防の意識をもっと強く持ってもらいたいと思います。

活動の場を作る時の、私たちのキーワードは、主催者、参加者の安心感です。今、不要不急な行動は自粛するように言われています。朗読・読み聞かせ活動は、不急ではないかもしれませんが、不要なものではないと思います。今はまだ自粛の時です。いつかまた活動ができる、そんな希望を皆さんが持てるように心がけていきたいと思っています。

正しく恐れることを忘れずに、心だけはコロナに負けないように、皆さんと一緒にこの局面を乗り越えていきたいと思っています。



新型コロナウイルスの影響で・・・

- 市内社会教育施設が閉鎖し・・・
 - ・各種内少年育成団体、社会教育団体の会議等が行えない。
 - ・協会は集まらず、書面決議で行う。
- 状況が改善し、開催したが・・・
 - ・人を集める事業がほとんどで、実施することが難しい。特に、子どもや高齢者が集まる事業は実施できない。
 - ・講演会や研修会などは、夏までは開催を控えた。その後も見通しが立たない。

何かできないか ➡ オンラインでできることは？

事例① おうちで「わくわくチャレンジ」

各家庭で、子どもだけでも、親子でも、オンラインで体験活動ができないか。動画配信をすることはできると思うが、それだけでよいだろうか。

↓

学習管理システム（LMS）を用いることとした

動画視聴 資料配布 小テスト 学習履歴

使用システム：Incha Board（オフィス3Dシーティングシステム）

事例① おうちで「わくわくチャレンジ」

●わくわく動画deチャレンジ

事例① おうちで「わくわくチャレンジ」

●わくわくWebチャレンジ



タイトルは、「コロナでも学びを止めない！オンラインを用いた社会教育行政の挑戦」です。

新型コロナウイルスの影響によって市内の社会教育施設が全部閉館となりまして、各種団体の会議が行えない状況になりました。総会についても、集まらずに書面決議で行いました。

状況が少し改善して開館をしたのですが、その後も、人を集める事業が、生涯学習課では、実施することが難しい状況が続きました。特に子供や、高齢者が集まる事業がほとんどできない状況で、講演会や研修会についても、夏までは開催を控えることになりました。

その後もなかなか見通しが立たないということで、オンラインでできることを考えることにしました。

その一つとして事例①、おうちでわくわくチャレンジというものを行いました。わくわくチャレンジというのは、地域の方々の参画を得て、小学生を対象に様々な体験活動を行うものです。

昨年は、おもしろ理科教室とか、遊びの教室、お料理教室、楽しいスポーツ教室の4種類の教室で、年間合わせて20回程度、実施しましたが、今年度は、8月までの募集は中止をしました。

これに代わるものとして、各家庭で、子供だけでも、親子でもオンラインで体験活動ができないかということで、おうちで「わくわくチャレンジ」を考えました。これには、動画視聴、資料配布、小テスト、学習履歴が残る学習管理システムを用いることにしました。

おうちで「わくわくチャレンジ」には、わくわく動画 de チャレンジ、わくわく Web チャレンジ、桜川市生涯学習課からのわくわく挑戦状の、三つの内容を準備しました。

一つ目の、わくわく動画 de チャレンジですが、現在11種類、22本の動画を作成しています。内容は遊び、料理、スポーツ、また、例年のわくわくチャレンジにはない、歴史に関する動画も作りました。動画は、YouTubeの限定公開にして、学習管理システムへ埋め込みました。

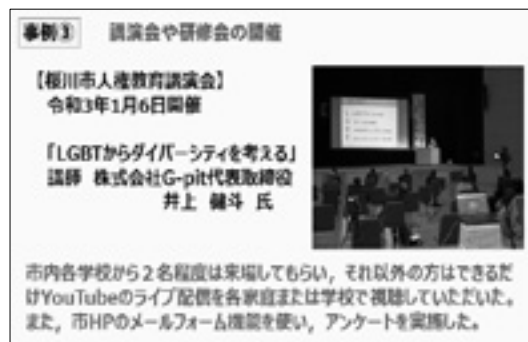
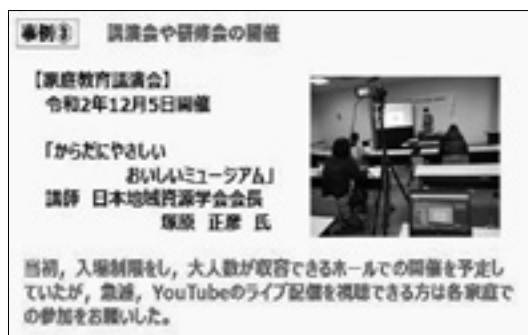
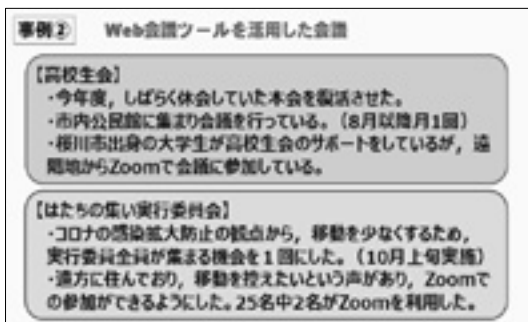
二つ目の、わくわく Web チャレンジですが、現在4種類を準備しています。内容は、桜川市に関する内容をクイズにして出題しています。中にはわくわく動画 de チャレンジを見てから取り組む内容も含まれています。桜川市の問題を集めた、さくらっ子郷土検定は、最後に採点もできて、80点以上で合格にしています。

三つ目の、わくわく挑戦状ですが、こちらも4種類作っています。パズル問題をダウンロードして取り組めるようにしています。例えば、パズル10の部屋は、足して10の固まりを作っていくものです。

参加方法ですが、登録の申請をした方に、IDパスワードとURLを送付する形で進めています。また、チラシを長期休み前に、市内の全児童生徒に配付し、登録を促しています。

成果ですが、休校期間中だった運用開始直後と、それから夏休み期間中にアクセスが多くありました。

課題ですが、登録制にしたことで、子どもだけでは難しく、親子ともに興味を持たなければ登録につながらないということがありました。また、定期的にコンテンツを増やしていかないとアクセスが減ることが分かりました。



高島さん、ご発表ありがとうございます。ありがとうございました。

高島さんは、学校の教員から社会教育主事として桜川市の方に派遣されているわけですが、教員籍の経験を生かして、子ども達の笑顔を想像しながら社会教育行政で活躍されている様子が伝わってきました。

コロナ禍において、様々な苦労があったと思いますが、地域の方々の学びを止めないように工夫をしながら挑戦されている姿に感銘を受けるとともに勇気を与えていただきました。



事例②です。Web 会議ツールを活用した取り組みです。高校生会は、しばらく休会をしていて、今年度、ようやく復活し、8月以降に月1回ほど会議をしています。高校生会には、桜川市出身の大学生にサポートで入ってもらっているのですが、やはり遠方であることやコロナも心配だということで、ズームで会議に参加をしてもらっています。

それから、はたちの集い（成人式）の実行委員会ですが、感染拡大防止の観点から、集まる機会を1回にしました。遠くに住んでいる方々は、移動を抑えたいという声があり、ズームで参加をできるようにしました。

課題ですが、事前に資料を参加者に送ってはいったのですが、印刷ができていなかったり、端末が用意できていなかったりしました。画面共有の準備をしていればよかったと反省しております。

事例③です。12月5日に家庭教育講演会で「体にやさしいおいしいミュージアム」を演題に日本地域資源学会会長の塚原先生からお話をいただいたことです。当初、この講演会は、多くの人数が入るホールでの開催を考えていました。しかし、募集をしている最中に、茨城県でも感染が広がってきて、急遽ユーチューブのライブ配信に切り替えました。写真にあるのは、ホールではなくて、レッスン室で講演を行っている様子です。ここに何名かいちゃいます。それ以外の方はユーチューブで見てもらう形をとりました。こちらも限定公開で行っております。講演会の様子は、その後、動画で視聴できるような形にしました。

また、1月6日に人権教育講演会を行いました。この日は、1都3県で緊急事態宣言が出される前の日でした。「LGBTからダイバーシティを考える」を演題に、株式会社ジービット代表取締役である井上様から講演をいただきました。人権教育講演会は、学校の先生方が参加するのですが、コロナ禍でしたので、各学校から二名程度来場してもらい、それ以外の方は、ユーチューブのライブ配信を家庭または学校で視聴する形をとりました。また、市のホームページのメールフォームの機能を使ってアンケートを実施しました。講演会の様子は、その後、オンデマンドの配信を行っています。

成果ですが、参加者からは、新型コロナウイルスの状況を気にすることなく、講演会や研修会に参加することができ、ありがたいという声がありました。また、ライブ配信後も、オンデマンド配信で確認することができ、参加者にとってプラスになっていると耳に入っております。

課題は、講演会は、来場者が少なく反応が感じられなくて、講師の先生が話をしにくい様子が見受けられました。それから、アンケート回収率が、例年よりだいぶ下がってしまったので、今後工夫が必要だと感じています。

今後、新型コロナウイルスの状況により、開催方法が変わることが考えられることから、講師に依頼をする際には、ライブ配信やオンデマンド配信についても承諾を得ながら企画をすることが大切だと考えています。また、講師が来られない場合も出てくると思いますので、遠隔地から行うリモートの講演会についても考えていく必要はあると感じています。

それと人数が限定される講話型の研修会では、ユーチューブのライブ配信よりも、ウェブ会議ツールを使って行った方がよいと感じましたので今後検討していきたいと思っています。



ここからは、共通の話題で進めたいと思います。

皆さんのご発表から、新型コロナウイルス感染症の影響で、様々な制限を受ける中、いろいろ工夫をされながら、活動をされてきたことが分かりました。皆さんは、学びの機会を止めないように活動をされているわけですが、その原動力になったことは、どのようなことなのでしょう。ぜひ、お聞かせ願いたいと思います。



原動力といいますか、心に秘めながら、走りながら、考えながら、活動してきた理由は、大きく分けると二つあります。

一つ目です。前橋市の公民館長会議が4月にあり、その中で生涯学習課長から「地域社会が動揺しているから、各地区に存在する公民館は地に足をつけて、ほっとするような雰囲気や空間であり続けなさい。市民の皆さんは、日々の生活で大変かもしれないけれど、公民館は形を変えながらも講座をして、存在感を示しなさい。」という話がありました。大変示唆深い言葉で、地域の皆さんのためにやれることをやろうと思いました。

二つ目です。現在の公民館は使う方と使わない方に二極化していると思います。だから、新しい発想とか、新しい取り組みをやるならば、今だろうと考えました。そうすることで、今までアプローチできなかった方々へのアプローチのよいチャンスなのかもしれないということです。成果が出るかどうか分からないですけど、とりあえずやってみるという感じでした。それが原動力だったと思います。



私の原動力は、決して綺麗ごとじゃなくて、受講者の方の満足感、達成感を目の当たりにできることです。

茨城県立図書館の読み聞かせ研修講座は、生涯学習として生きがいを持つ活動と同時に、子供たちに読書を広めるという活動も目的にあるのですが、本当に皆さん、朗読とか読み聞かせが大好きな方ばかりなのです。私が一生懸命やると、皆さんは私の気持ちを受けてくださって、最初と最後では、声の出し方、表情が全く違ってきます。そして、やってよかった、早くボランティアしたいという声を聞きます。それが原動力になっています。



まず、おうちでわくわくチャレンジについてですが、これを続ける原動力になったのは、子供の笑顔だと思っています。オンラインでしたので、直接笑顔を見ることがなかったのですが、子供たちや保護者が笑顔になってくれることを想像しながら、動画やパズルなどを作成しました。

それから、講演会や研修会については、人を集めることができないからやらないということになると、新型コロナが収束した後、できることが少なくなるのではないかなという不安がありました。コロナ禍で優先されるのは、命や生活で、生涯学習課の事業はストップしても、困る人はそれほど多くはないと思います。しかし、少数でも困る人はいますし、この地域の未来のことを考えると、子供たちの体験活動や家庭教育など少しでも

学びの場を作っていけないといけないという思いがありました。



皆さん、地域の人たちの笑顔や喜びが原動力になり、コロナ禍で様々な制限を受けながらも活動を続けられたのですね。

続いて、活動をこれまで続けてきた中で、特に苦労した点、または、活動してきてこれはよかったと思った点について、お聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか。



困っているところは、朗読・読み聞かせは声を出しますので飛沫です。黙読では、朗読活動になりませんので、飛沫感染を抑えられなければ、活動ができないというのは本当に

困っています。

よかった点は、活動を再開ができたときに、朗読は楽しいとか、声を出すのは楽しいという、皆さんの声です。また、指導させていただくのは、社会貢献だと思いますので、社会の役に立っていると感じられることがよかったことです。



とりあえずやってみようと思い始めたことなので、大変だった部分はあるのですが、苦労を大きく感じたところはなかったかなと思います。

一方で、今後、どのように継続していくか、新しいものをどう追加していくかということが、苦労するかなと感じています。

活動してよかったと思うことは、学習履歴や視聴回数から、取り組んでもらえていることが分かることです。それと、会場まで行けないから参加できないという人たちが、オンラインであれば参加ができるとか、講演を聞きたいけれど都合がつかなくて参加できないという人たちが、時間がある時に講演の様子を動画で見られるとか、可能性が広がったというところが、活動してよかったなと思ったことです。



苦労した点は、それほどありませんでした。技術的なことは、インターネットで調べることができます。苦労したというか残念だったことは、すごくよい活動されている

のに、ユーチューブ講座の講師をお願いしたときに、SNS上に映像が残るのは嫌ということで協力が得られなかったことです。

よかった点は、子育てや育児によるストレスや不安を抱えているママさんから、ズームを通して、皆さんとお話ができて救われたという参加者アンケートをもらったことです。

もう一つは、ユーチューブの講座で、市民講師の方が、私もユーチューバーと言って、楽しんでもらったことです。そういう方は、公民館講座の講師をしたことがない方が多いので、市民講師を発掘できている点からもよかったと思います。



コロナ禍で、様々な制限を受け、苦労が多いはずですが、皆さんの話を聞くと、工夫をしながら行動することで、ピンチをチャンスに変えていると感じます。

コロナだからできないのではなく、できる方法を考え、行動することが大切だということを教えてもらったと思います。



シンポジストの皆さんから、お互いに聞いてみたいことなどはありますでしょうか。



茨城県立図書館の朗読・読み聞かせ講座の参加者は、60～80代の方が多いです。ですから、オンラインで参加するのが難しい状況です。お二方は、オンラインを駆使されて、成果も上げていらっしゃると思いますが、オンラインが苦手な高齢者層に対する対応はどうなさっていたかをお伺いしたいと思います。



澤さんのご指摘は、まさにその通りだと思います。結論は出ていませんし、取り組み始めたところではあるのですが、インターネット環境がない方は、自宅でユーチューブは見られません。また、電子機器に対して、アレルギーがある方もいらっしゃると思います。そこで、タブレットを、公民館で貸し出し、希望があればレクチャーをするという取り組みを行う予定です。公民館のホールのロビーで、端末を借りて、講座を見ようとか、インターネットを見ようとか、そういった場を提供し、少しでもオンラインに接する機会をふやしていけたらと思っています。



自分が今回取り組んだ内容は、子供や保護者といった、オンラインに対応できる方たちが中心だったので、この課題については今後かなというところがあります。過去に公民館でスマホ講座を行ったことがあるのですが、次考えていることは、高齢者学級で、これまでの学習内容にプラスして、インターネットに触れる時間を作れたらいいなと思っています。



ありがとうございました。ICTが推進されることで、情報格差も生まれてくると思います。国からは、誰一人取り残さない社会の実現を示されておりますので、今後、生涯学習・社会教育の分野で取り組んでいくべき重要課題になるかもしれませんね。

最後に聞いている視聴者の皆さんに、シンポジストの方々から、熱いメッセージをお願いできますでしょうか。



振り返ると私どもの桂萱公民館だけではなくて、仲間の公民館のメンバーといろいろと意見交換しながら進めている部分があります。例えば栃木県足利市の公民館の方が視察に来てくださって、いろいろと意見交換をさせてもらいました。その中で、著作権関係の同意書の必要性とかに気づかせていただいて、我々も一歩進めたということがありました。

また、県内に、館林の多々良公民館がありまして、そこはズームを使って、先進的に取り組んでいるのですが、そこの職員の方と意見交換することができました。おそらく新しいことなので、一つの館で実施しようとしても大変だと思います。横のネットワークづくりはとても必要で、それを実感しました。

その意味でも今回のシンポジウムはすごく意義深いと思ってしまして、これをきっかけにいろいろなところで意見交換したり繋がったり、お話を聞いてみたりすることで、全体のレベルが上がっていくと思います。こういう時は、横の連帯というか、情報を共有しながら進めていった方が、格段に早く進んでいくと思いますので、情報交換しながら、進めていくのが大事なのだろーと思います。情報提供できることはしますので、ぜひ、情報提供してください。



私からいえるのは、コロナ感染が始まってしまったから元に戻らないと嘆く方が多いのですが、心だけはコロナに負けないように頑張りましょうということです。

いろんな形で、人と関わって、朗読・読み聞かせ活動ができるようにしていきたいと思います。

オンラインとかが苦手だという方もいらっしゃると思いますが、他の方のお話にあったように、意識改革できるところ、新しいものにチャレンジできることは取り組んで、人との関わりを増やしていきたい、困難な状況を一緒に乗り越えていきましょう。



今回の発表内容についてですが、たくさんの方々の力があってできた取り組みです。桜川市の生涯学習課の職員だけではなく、他の課の職員であったり、日頃からお世話になっている地域の方々であったり、さらには、他の市町村の社会教育主事の皆さんのアイデアなど、いろんなものが繋がってできたものになります。

現在のコロナ禍で、それぞれの立場の方々が様々な工夫をして乗り越えようとしていると思います。生涯学習・社会教育も今回、新型コロナウイルスによって厳しい状況に置かれていると思いますが、同時に、これまでにない工夫をするきっかけを与えたのではないかなというふうに思っております。今日お2人から素晴らしい発表を聞くことができ、またお話することもできとても勉強になりました。ぜひ今後の取り組みに生かしていきたいと思ます。本当にありがとうございました。



3名のシンポジストの皆さんから心強いメッセージいただきました。本当にありがとうございました。

今回のシンポジウムですが、ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性をテーマに、公民館、図書館、社会教育行政の関係者の方々にシンポジストに進めて参りました。それぞれの立場で工夫をしながら、ウィズコロナ時代において、生涯学習・社会教育の実践をされていることがよく伝わってきました。

どのような状況に置かれましても、人間は1人で生きていくことはできません。人と人のつながりや、人づくりはとても大切なことだと思います。それを担っていくのは、我々生涯学習・社会教育に携わる者たちの使命ではないかなと感じております。今回のシンポジウムでは、その可能性が見えてきたのではないのでしょうか。

3人のシンポジストの皆さんに改めて感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

クロージング

池田 馨

茨城県生涯学習・社会教育研究会 副会長



【新型コロナウイルス感染症の影響】

新型コロナウイルス感染症は、地球上にいるすべての人間が、同時代に同一課題を共有する「人類の幸せ課題」となった。

第6回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会を開催することは、この課題に生涯学習・社会教育はどのように対峙すべきかを深く検討することである。

【テーマ設定について】

- ・ パンデミックの今とこれからを主たるテーマにすること
- ・ 今、社会教育はどのように立ち向かうべきかを実践的に示しうる内容
 - * 全国の社会教育関係者へのメッセージ性を含んだモデル提案
- ・ 第7回大会に向けての行動提案になるもの

【第1部・第2部について】

- ・ 第1部は、同時代に活動する社会教育関係者には示唆に富むものになった。
刺激的な論点を挙げれば、基調講演の「人類の特性である絆」は「コロナ後の社会の民主主義思考」にどのような影響を及ぼすのか。そして、その時、「社会教育はどのような役割を果たすべきか」ということになるだろう。
- ・ 第2部では、「新しい取組を始めるのは今。ピンチをチャンスに変える。とりあえずやってみる。」との発言から、生涯学習・社会教育に携わる者としての熱い使命感を感じた。

【オンデマンド配信による開催の意義（副次効果を含む）】

大会内容がオンデマンド配信であることにより、多様な副次効果を発揮することとなった。

- ・ オンデマンド配信期間が開催時期であるとの認識に伴い、一過性の行事が継続性を重視する内容に転換した。
 - * 学習成果を継続的に活用することによる同時代の社会教育課題の共有化
- ・ オンデマンド配信技術の習得に伴い、ウィズコロナ時代・AI時代の社会教育力が高まった。
- ・ 対面型・ライブ型学習から双方向型・継続型学習への転換
- ・ 協働型行政への転換の中での社会教育の位置を明確化

【最後に】

第7回大会での多様な実践報告へつながることを期待したい。以上のクロージング提案を持って関係者へのお礼にかえたい。

第6回大会を終えて

～実行委員から～

今大会は最終的には対面での実施が中止という結果になってしまいました。開催に向けて多くの関係者の方が「どのような形で開催するか」ということを本当にギリギリまで考えられた中で、苦渋の決断であったかと思います。生涯学習・社会教育に携わる皆様と直接お会いすることができなかったことは大変残念ではありますが、オンライン配信されたパネルディスカッションなどを拝見して、改めて強く思うことができました。それは、新型コロナウイルスという目に見えない脅威に対して「今、何ができるか？」ということ、皆が考え、これまでの形にこだわらず実践していく。そこに課題解決のための生きた学びがあるということです。学び続けることで個人の知になり、それが社会の知になり、人々の不安を解消してくれるのではないのでしょうか。来年度、皆様と「学ぶこと」について改めて考える大会が開催できることを願っております。

茨城大学 社会連携センター長 中村 麻子

第6回大会は、これまでと大きく異なる状況下でどのような大会を目指すべきか、大会の存在意義と真正面から向き合う1年間でした。一旦は対面型と遠隔型のハイブリッドによる開催に決まりましたが、さらなる状況の変化の中で最終的にはすべて遠隔型による実施となりました。

この1年間の大学での研究・教育活動の経験も踏まえ、これまで対面型で実施してきたプログラムを遠隔型によってすべて代替することはできないと考えています。それを無理に代替しようとするのではなく、代替できないものを切り捨てるのでもなく、あらゆる可能性を包み込んで新しい道筋を示していくことが教育とりわけ生涯学習・社会教育の役割ではないかと、今大会の基調講演やパネルディスカッション・シンポジウムを通して意を強くした次第です。

最後になりましたが、今大会にかかわられたすべての方々へ心より御礼申し上げます。

常磐大学 人間科学部教育学科 助教 松橋 義樹

教育のあり方に世界規模で大きな影響を及ぼしているCOVID-19ですが、このようななか、学生と共に「オンラインによる親子教室」という新たな取り組みに挑戦しました。

例年私のゼミは、NPOや自治体などが主催する子ども向けイベントにて活動の場をいただいていた。しかし今年度、これらは全て中止となり、学生たちに学びの場を提供することが困難になっていたのです。

そこで、「オンラインによる親子教室」を計画するに至りました。計画の立案から学生主導で進め、前期・後期合わせて7回開催することができました。

当然のことながら、対面での実施が何にも変え難くはありますが、この状況下で、せめて画面越しにでも触れ合おうということにしました。参加した親子からも楽しい時間となったとの感想をいただき、そして学生たちは、久しぶりに経験した子どもたちとの関わりに、改めて保育職に対する価値を見出したようでした。

茨城キリスト教大学 文学部児童教育学科 教授 中島 美那子

昨年、第5回大会「関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会」に、私は、茨城県教育庁生涯学習課の社会教育主事として関わらせていただきました。といっても、私の所属していたグループは直接運営に関わっておらず、運営の補助という役割でした。しかし、二日間の交流会をとおして、実行委員長である茨城大学名誉教授菊池龍三郎先生をはじめ、実行委員会の方々、各地で実践をされている方々、当日参加された方々、お一人お一人の熱い想いに間近で触れ、感銘を受けるとともに、多くの学びを得ました。今回の第6回大会では、広報部の一員として関わらせていただき、「いかなる状況においても学びを止めない」という熱い想いに改めて感銘を受けるとともに、「このような状況だからこそ自分には何ができるだろうか」と自身の考え方を省みる機会となりました。今後、社会教育に携わっていく上で、今回の貴重な経験が、心の拠り所となっていくのだと確信しています。

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター
専門調査員 菅谷 政之

2010年、社会教育の全国大会が当県で行われ、当時その事務局を担当していた私がコーディネーターに依頼したのが、実行委員長の菊池先生でした。あれから10年、大学時代を過ごした地で、再び菊池先生にご指導いただける幸運を喜んでいた矢先、新型コロナウイルスが猛威を振るい始めました。

大会開催が危ぶまれる中、社会教育の歩みを止めないためリモート形式の導入など様々な工夫改善を図っていく実行委員の皆様の姿に、「現代的課題の解決」は社会教育の本務であることを改めて痛感しました（何のお力にもなれず申し訳ありませんでした）。

第四次産業革命、Society5.0、予測困難な社会を生きる私たちに必要な力は……。 「大事なものは変わっていくこと。そして変わらずにいること。」この相反する課題を可能にするには、ピンチをチャンスに変える逆転の発想や社会関係資本の増大等が重要であり、「社会教育が育む力」が大きな糧となると考えています。

福島県教育庁社会教育課 主任社会教育主事 関 忠昭

前回の第5回大会に引き続き、県外実行委員として本交流会に参加させていただいた。オンデマンドで配信されたパネルディスカッション、シンポジウムを視聴し感じたことは、「いかなる社会情勢においても、地域に暮らす多様な人々がお互いに理解し合い、共に生きていく環境を築いていくためには、社会教育が極めて重要な役割を果たす」ということである。そして、今後続くことが予想される新型コロナウイルス感染症への対応を通じて、誰一人として取り残されることのない社会の実現を目指すために、生涯学習・社会教育はどうあるべきかを考えさせられた。大切なことは、それぞれの場において「今できること」を考え実践し「学びを止めない」ことである。その手段の一つとして、ICTを活用するなど、新たな学びの可能性を広げていくことが重要であると考えている。今回の大会は、今後の生涯学習・社会教育の在り方を示唆する大変意義ある“提案”となった。

群馬県教育委員会事務局生涯学習課 社会教育主事 知久 鉄平

今大会初めて実行委員として参加しましたが、様々な県の生涯学習に携わる方々と会議等で交流でき、とても勉強になりました。

さて、今年度は、「新型コロナウイルスの感染拡大」にともない、社会教育にとって一番大切な「人と人とのつながり」を築いていくことが難しく、今も困難な状況が続いております。埼玉県では、このような状況の中ですが、新規事業「外国人親子への支援と地域住民とのつながりづくりモデル事業」を立ち上げ、講座等を実施して参りました。

「誰ひとり取り残さない社会の実現」のため、様々な生きづらさ、困難さを感じながら暮らしている方々が、「安心して暮らせる埼玉県」をつくっていく必要があると考えています。新しい生活様式の下では、学びの場を創出することや仲間づくりの機会を設定することなど人が集まるのが難しい状況ですが、今大会の事例等も参考にしながら、学びの場等を創出して行きたいと思います。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習課
社会教育主事 阿左見直昭

「熱を共有する。」

第1回実行委員会で胸に刻んだ言葉です。それ以来、コロナ禍において何をするにも対面や対話を制約せざるをえない中、いかにして熱を共有するのか、そもそもできるのかと考えてきました。

「できる。」オンデマンド公開による研究交流会に参加させていただいての、私の結論です。実践や信念に基づく力強い言葉からは、学ぶ喜びを感じるとともに、生涯学習・社会教育の意義について、また少し理解を深めることができました。そして、今すぐにでも何かしたい、しなければならないというような衝動に駆られました。

この「熱」を自分の中に留めておくわけにはいきません。「自分が行動すれば、一人でも喜ぶ幸せ。」「フィジカルだけでなく、心の命を生かす。」

新たに刻んだ言葉を胸に、自分にできることを積み重ねていきたいと思います。

神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課
主幹兼社会教育主事 尾上 夏子

～生涯学習・社会教育に関わる学生の皆様より～

「安心は技術だけではない」という言葉は、今この時代を生きていると忘れがちであると感じた。現代で生きていく上では、機械の力なしにはここまで不便なく暮らすことはできない。しかし、子どもと触れ合う中では、機械と子どもでは安心感は育まれない。保育者と子どもの毎日の触れ合いの中に生まれる安心感は、子どもの成長に大きく影響する。どれだけ機械が発展して、人間に近いAIが誕生しても、子どもとの信頼関係を築くのは対人間であるべきだと強く感じた。

川野 栞（茨城キリスト教大学 児童教育学科幼児保育専攻4年）

ゴリラ型の社会から、サル型社会へ変化しているとするお話では、ソーシャル・キャピタルが希薄化している今、改めて、お互いに助け合ったり、相談できる人がいたりすることの大切さに気づきました。しかし、コロナ禍により、直接関わることが出来ない為、オンラインなどのデジタルを上手く利用しながら、共感性や信頼性を高めていくことが求められると思いました。デジタル化に伴う生き甲斐格差で小・中学生が高齢者にスマホ講座をするというお話がありましたが、私も祖母にスマホの使い方を教えたことで、祖母は会えない家族とビデオ通話等で繋がることができていく為、私達若い世代が社会問題を理解し、出来ることを実践していくことも人々が繋がる社会になる為に大切だと思いました。また「自分は相手ということによってより豊かな時間を過ごせている」という考えが特に印象に残りました。面倒くさいな、行きたくないなと思っていても、何か得られることがあるかもしれないというように、その時間に価値を見いだせるか否かによって、人々との関わり方も変わってくると思いました。

大内 香奈（茨城キリスト教大学 児童教育学科幼児保育専攻3年）

乳幼児期に十分な愛情を与えることが子どもの死亡率を減らすことに繋がるというのは、保育者を目指す私たちが必ず理解していないといけないことであり、保護者や周りの人達と協力して子育てをすることの重要性を改めて感じた。

さらに、情報化が賞賛されている現在、デジタル社会のデメリットを知る機会は少なく、便利な世の中に慣れてしまっていたが、デジタル社会＝利益や自己優先の社会と知り、たしかにそういえると感じた。自分たちがいかに楽に生きられるかを考えてデジタル社会に頼りきりになってしまっていたことに気づいた。ただ依存するだけでなく、人間らしさを出しつつ、情報化社会と共存していくことが大切だと思った。

渡邊 和奏（茨城キリスト教大学 児童教育学科幼児保育専攻4年）

コミュニケーションについて人間のみ対面する時に相手と距離を置き、言葉の獲得後もあえて同じようにする理由の中に、私たちは目の表情から相手の気持ちを読んでいるということを知り、文面から相手の本心を読み取りづらいことの理由はこれであったのだと思った。

そして、現代社会はコミュニケーションと言葉の獲得を通して共感力や想像・創造力を手に入れ、認知革命から通信革命、情報革命と変化していったが、便利になった反面「人間社会のサル化」が進んでいることが挙げられ、共感力を使った学びの場が求められていることを知った。個性を尊重し、人々が信頼感を持って繋がる社会にしていくためには、AIに頼ることのリスクを知るべきだと思う。

最後に、教育とは人間だけが持つ利他的で偉大な能力であり、自身で生活をデザインしていくことを意識しながらデザイン力を付けていくことが私たちに必要だと学んだ。

私も時間の使い方を足し算(融合)と捉え、同調性を高めていきたい。講演、対談インタビュー共に興味深かった。

加藤 里佳（茨城キリスト教大学 児童教育学科幼児保育専攻4年）

【ポエム】 マスクの下に～「4つの免疫」を学ぶ～

700 万年前にチンパンジーと枝分かれした私たちの祖先は幾多の困難に直面した
人類にとって、地球環境は決して優しくはない
40 億年前から住み続けるウイルスやバクテリアがあふれる世界だ
20 億年前の全球凍結以来、多細胞生物は多様な進化を遂げながらこの環境に暮らす
数多の生物群が、この舞台から去っていった

人類とコロナウイルスの関係は共進化だという
「共に進化しながら」、適応を繰り返し、地球環境に生き続けている
私たちは、今、新しい共進化の段階に入った
さて、どう適応するのか
生涯学習・社会教育は何ができるのだろうか

生存を可能にする、免疫反応という人間の自己防衛軍は 4 つある
身体免疫は、ウイルスとの直接的戦いの場にある
何億年もかけて形成した、免疫細胞群を私たちは有している
ウイルスとの戦いは時々刻々変化しながら、免疫システムへの支援を中心に戦っている

人類は「一人では生きられない」から連帯・共感の「**心の免疫**」を作り上げてきた
あいさつから始まる連帯の文化はもう一つの免疫に他ならない
同情（シンパシー）ではなく共感（エンパシー）が不可欠だ
パラダイムシフトは世代交代を伴いつつ「心の免疫」が悲鳴をあげている

社会は、人類の「幸せ装置」だ
つながって、共感して、生き抜くための「**社会免疫**」がきしみ始めている
連帯が、競争と葛藤へと姿を変え、生存課題を複雑化する
ワクチンをめぐる争奪戦は人類の悲しき性なのだろうか

そして、生物の舞台である地球が揺らぎ始めている
生態系という名の「**地球免疫**」は、免疫不全症候群を起こしている
SDG s は間に合うのだろうか
サイトカインストーム（免疫暴走）を前にたじろぐ私たちがいる

だからこそ、第 6 回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会は開催された

「パンデミックの今」を学ぶことは社会教育の基本的活動だ

「不明—不安—不信—不満」の不のサイクルを断ち切る役割を担う「学び」だ

この「学び」は、既存の領域を超え、現実を直視することから始まる
多様な市民活動やボランティア活動も、学びから始まってきた

「3密回避」のお触書は、自粛から萎縮へ心持を変化させた

人間のあらゆる活動を「3密回避」に適応させる課題に直面している

新しい考え方、新しい方法が不可欠だ

つながり、共感する思いと経験が不可欠だ

行く手には、**AI 社会の到来とコロナ後の社会が重なって待ち構えている**

次代を担う子どもたちに手渡さなければならないものはあまりに多い

しかし、幸せを求める「人類の冒険の旅」を降りるわけにはいかない

マスクの下に、覚悟を携えて立ち向かわなければなるまい

第6回大会は12月から3月までのロングラン

未経験の社会教育事業となった

社会教育はライブだ

だが、本当のライブは日々の暮らしそのものだ

だから、初めての4か月に及ぶライブ活動は真実に近づいたのかもしれない

本報告書の編集が終わってもライブは続いている

考えてみれば、一番のライブは日々の暮らしに他ならない

1年365日のライブ活動こそ新しい社会教育の姿なのかもしれない

マスクの下に、共感と連帯の思いを携えて生きなければなるまい

試練を捉え、試練を乗り越えるために

次世代への幸せのバトンを手渡すために

そして、明日に向かって今を生きるために

全国の生涯学習・社会教育関係者に連帯と共感の思いをもって

関東近県の新しき社会への挑戦をここに示す

【Design to Next II】の模索を示す

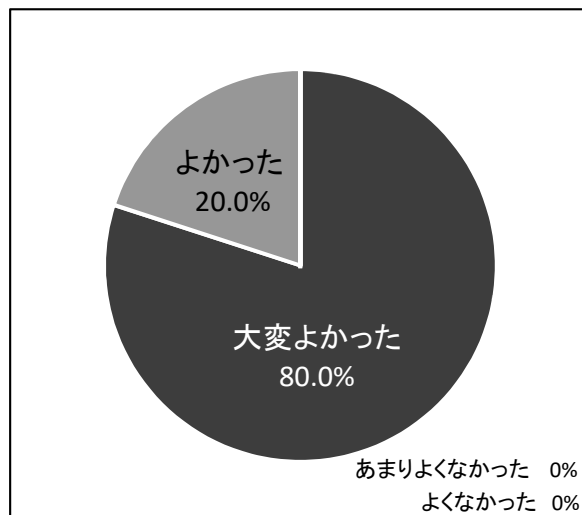
オンラインでの交流に少しの躊躇を感じながら



アンケート結果

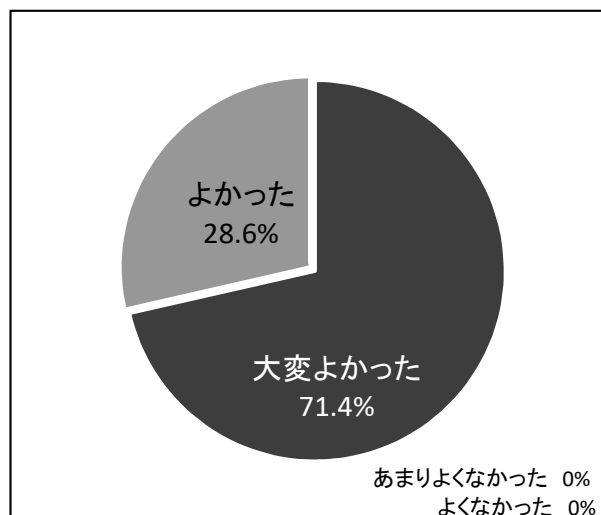
1 基調講演

- 今まで考えもしなかったことを考えることで、自分の視野を広げることができた。
- 大学教育とグローバル人材についてのお話が、全くその通りだと思い強く印象に残った。
- 漠然と理解していたことが理路整然と語られ、とても興味深かった。ウィズ（アフター）コロナの社会において、老若男女すべての人たちがどうすればより人間らしい暮らしを続けていくことができるかを問われていると思った。
- 人間とゴリラの子育ての観点からのアプローチが非常に興味深かった。
- 人類の進化から教育の在り方を見つめていくことが何よりも新鮮であった。
- 生物学や心理学などいろいろな観点からの講演で興味深く聞いた。
- ゴリラと人間を比較すると、脳の仕組みや発達速度など違いがあることを知った。例えば、人間は目を見て相手の考えを察するという対面コミュニケーションを発達させたという部分など納得することが多く興味深かった。



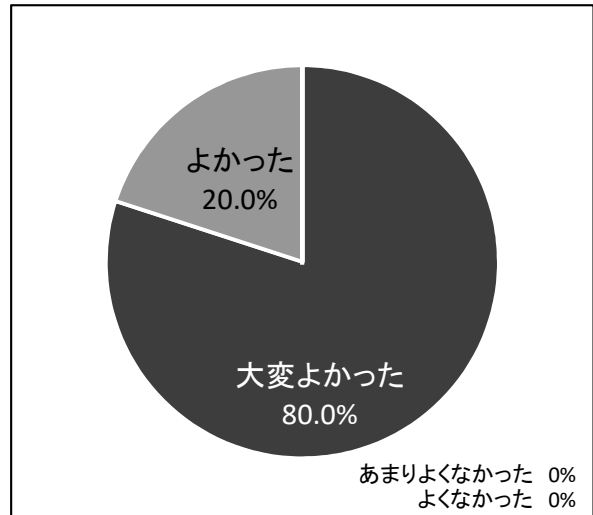
2 インタビューダイアログ

- 「時間」の捉え方が大変参考になった。
- 長谷川幸介氏が講演内容と社会教育との関係性について山極先生に深く切り込んでおり、基調講演を聴いたあとより、山極先生の考えを知ることができたと思う。
- 子供たちに同調力・共感力をいかに身に付けさせるか。それは「みんなの時間を楽しみましょう」という方向性になっていくという、お話しが印象的であった。
- 勘違いしていた部分への気づきや、曖昧な理解を再確認することができた。
- 協働や公共をデザインしていくという、自分の仕事をしていく上でのテーマができた。
- この時代に生きるものとして、具体的な行動の一つ一つが大切だと感じた。
- 長谷川先生のご質問が山極先生のお答えと大変コラボしており、興味深かった。また意図せずに最後に今後の生涯学習・社会教育に期待することとして山極先生より「デザインする力・デザインすること」とご提示頂いたことと、本交流会の主題が一致しており、偶然の一致とはいえ素晴らしい終わり方であった。
- 視聴者が聞きたいことについて、インタビューされていたと思う。



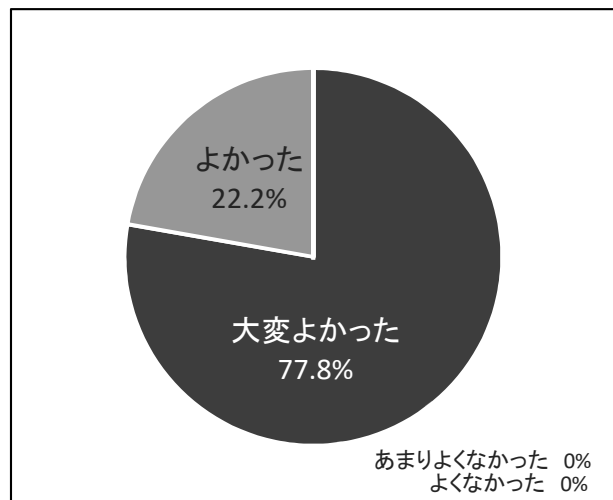
3 基調講演を受けて

- 社会教育の役割、使命というものを教えていただき、今後の業務にぜひ生かしたいと考えている。
- 菊池先生に今後の社会教育に求められる方向性や具体的事例もお話し頂き、大変参考になった。
- 今の社会教育で必要とされていることは何かを考えさせられた。菊池先生がお話していた「橋渡し」として、LINEやSNS利用のサポート、主権者教育、社会福祉との問題意識の共有は、今、社会教育の場で率先して取り組んでいくべきことだと思う。
- 現在の常識に挑戦しなければいけないという使命ができたと考えている。
- パワーポイントで基調講演を振り返り、解説や補足をしていただいたので、内容が入りやすかった。
- コロナ禍における社会教育の今後の展望について示唆をいただいた。
- 基調講演を視聴して、第三者からの視点も加わり、また違った側面から講演の内容を振り返ることが出来たので、より一層理解を深めるきっかけとなったと思う。



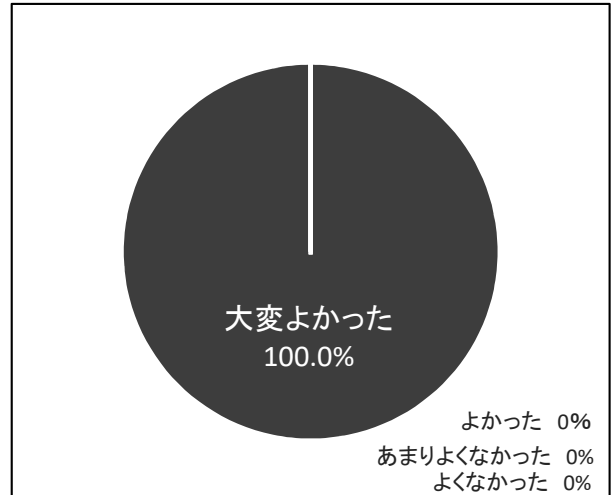
4 パネルディスカッション

- 複数のパネラーの意見や考えを聞き、今後の仕事に活かせるヒントがもらえた。
- コロナ禍においても、感染症対策を行い、工夫しながら生涯学習・社会教育に取り組んでいる生の声を聞くことができ、大変参考になった。
- 「コロナ禍の時短・休業自粛で廃業や命を落とした人もいる」という話が頭では分かっていたことだが、やはり衝撃的であった。
- 現場の声は生の声ということをしみじみと感ずることができ、当事者意識を感じることができた。
- それぞれの方の思いがよく伝わり、心が苦しくなることもあったが、それでも前を向いて活動していることに感動した。
- それぞれの視点からの現状と、今後について、よく理解することができた。
- コロナ対応の実態や課題について生の声が聞けたことがよかった。

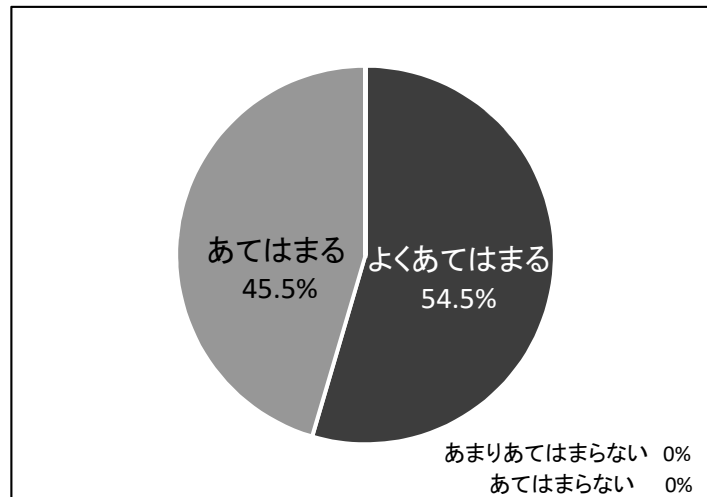


5 シンポジウム

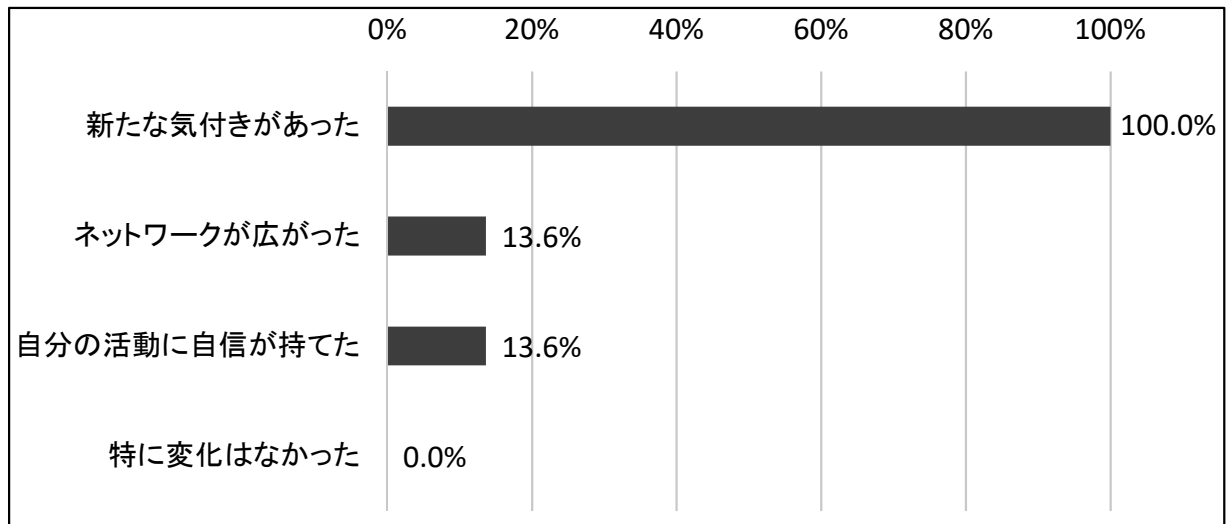
- コロナ禍でも諦めず、前を向いて進む姿勢に自分を重ね共感し、これからも頑張ろうと思えた。
- とにかくやってみて、あとは考えることが大切だと感じました。自分も一歩踏み出したい。
- 発表の視聴から現在の生涯学習・社会教育の課題と可能性について理解が深まった。
- 同じ社会教育主事として、実践例に刺激を受けた。
- コロナ禍での事業について主催者側、講師側の両面からの話が聞けた。成果と課題も明確であり業務の参考になった。
- 「学びを止めない」姿勢と実行力がとても勉強になった。今後の事業に生かそうとする気持ちを高めることができた。
- 現在の生涯学習・社会教育の課題と可能性について理解が深まった。



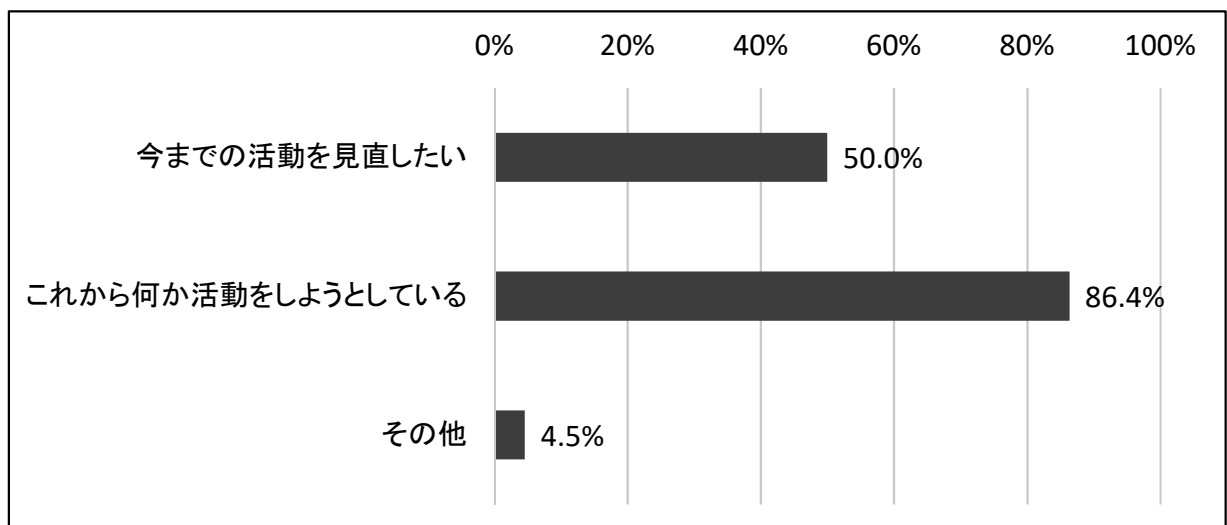
6 ウィズ（ポスト）コロナ時代における生涯学習・社会教育の可能性を感じることはできたか。



7 この大会をきっかけに、どのような変化があったか。(複数回答)



8 今後の具体的な活動について、どのように考えているか。(複数回答)

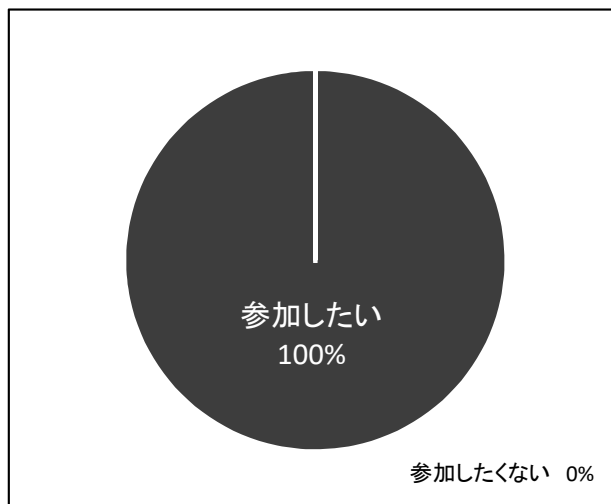


その他の回答

- 生涯学習コーディネーター活動に活かすこと。

9 次年度の交流会に参加したいと思うか。

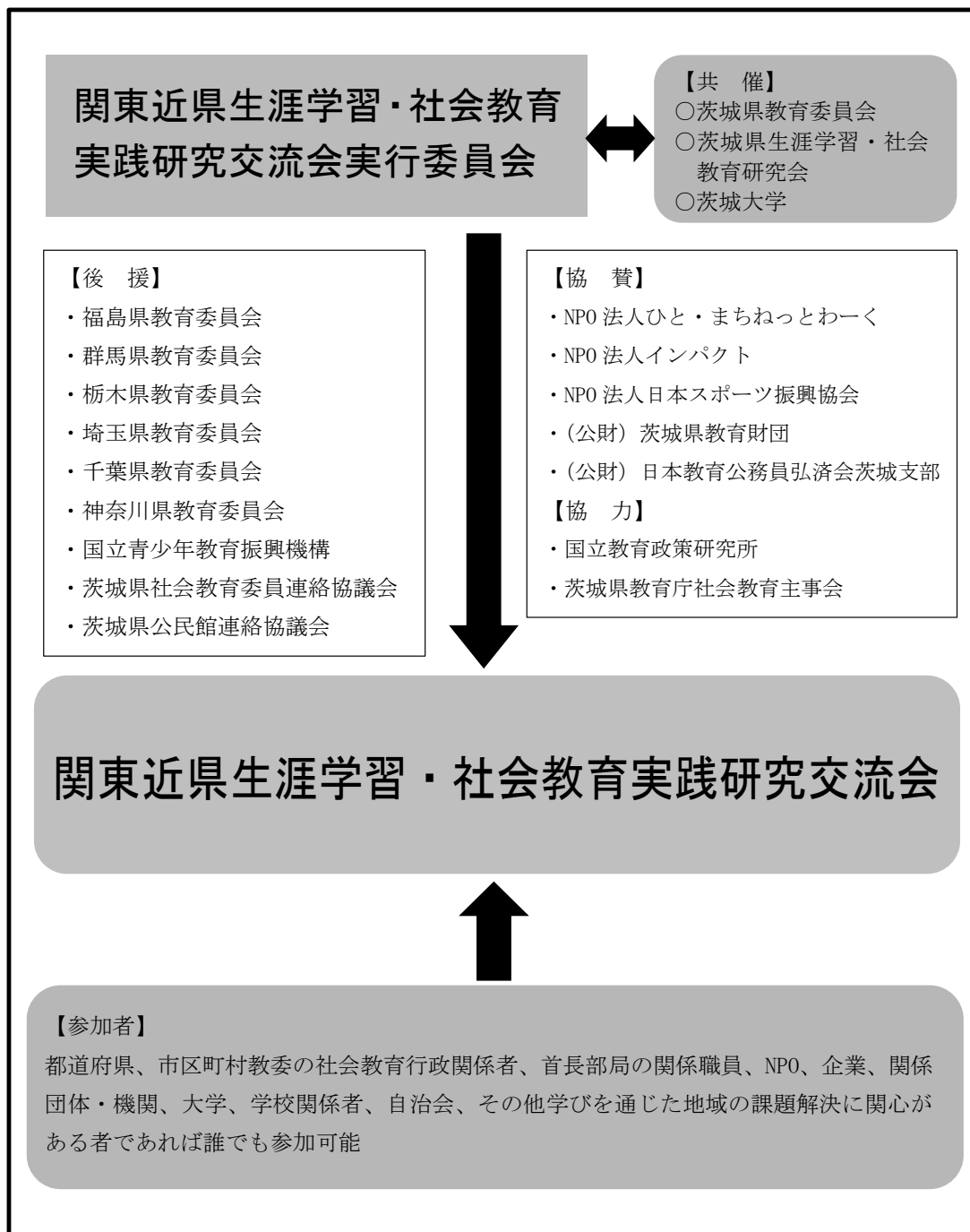
- 示唆に富んだ内容を知ることができ、また人とのつながりを得たいから。
- 社会教育関係者との貴重なコミュニケーションの場であるとともに新たな気づきを得ることができる場となっている。
- 他ではなかなか聞けない内容だから。
- 毎年参加しているが、本当に充実したものであると感じている。いつも他の参加者との交流も楽しみにしている。
- 引き続き勉強したいと思っている。今年こそ参加しようと思っていたところこのような状況になってしまったが、自宅で参加できたのは良かった。
- コロナと共存する時代が始まり、今年の変化だけでなく、次年度の変化についても、社会教育的視点からの意見を伺いたいため。
- 新しいものに対する知識やチャレンジするきっかけになると思うから。
- 学校だけが教育ではなく、まさに生涯にわたる教育が必要だと思っている。一人ひとりが心豊かな人生を送るため、いろんな場面でヒントや指針を発信されるよう希望している。決して大上段からでなく、独りよがりでなく。
- 初めての参加だったが、非常に興味深い内容だったから。できれば対面で多くの人と直に交流してみたいが、オンラインを組み合わせながらの企画でもぜひ参加したい。
- 「人とのつながり」こそが教育の根本である。どのような形にせよ、参加をすることで、新たなネットワークが構築され、活動に生かしていけるものと確信している。
- 今回初めて参加した。これまでは旅費の心配があり、現地参加を見合わせていたところがあったが、オンラインで在宅勤務を利用して自宅から視聴できたのでこのような形でまた参加できるとよいと感じた。
- コロナと共存する時代が始まり、今年の変化だけでなく、次年度の変化についても、社会教育的視点からの意見を伺いたいため。
- 次年度の開催方法はわからないが、対面で実際にいろいろな方と会って交流したいと思うし、オンラインであっても充実した内容であると思うから。



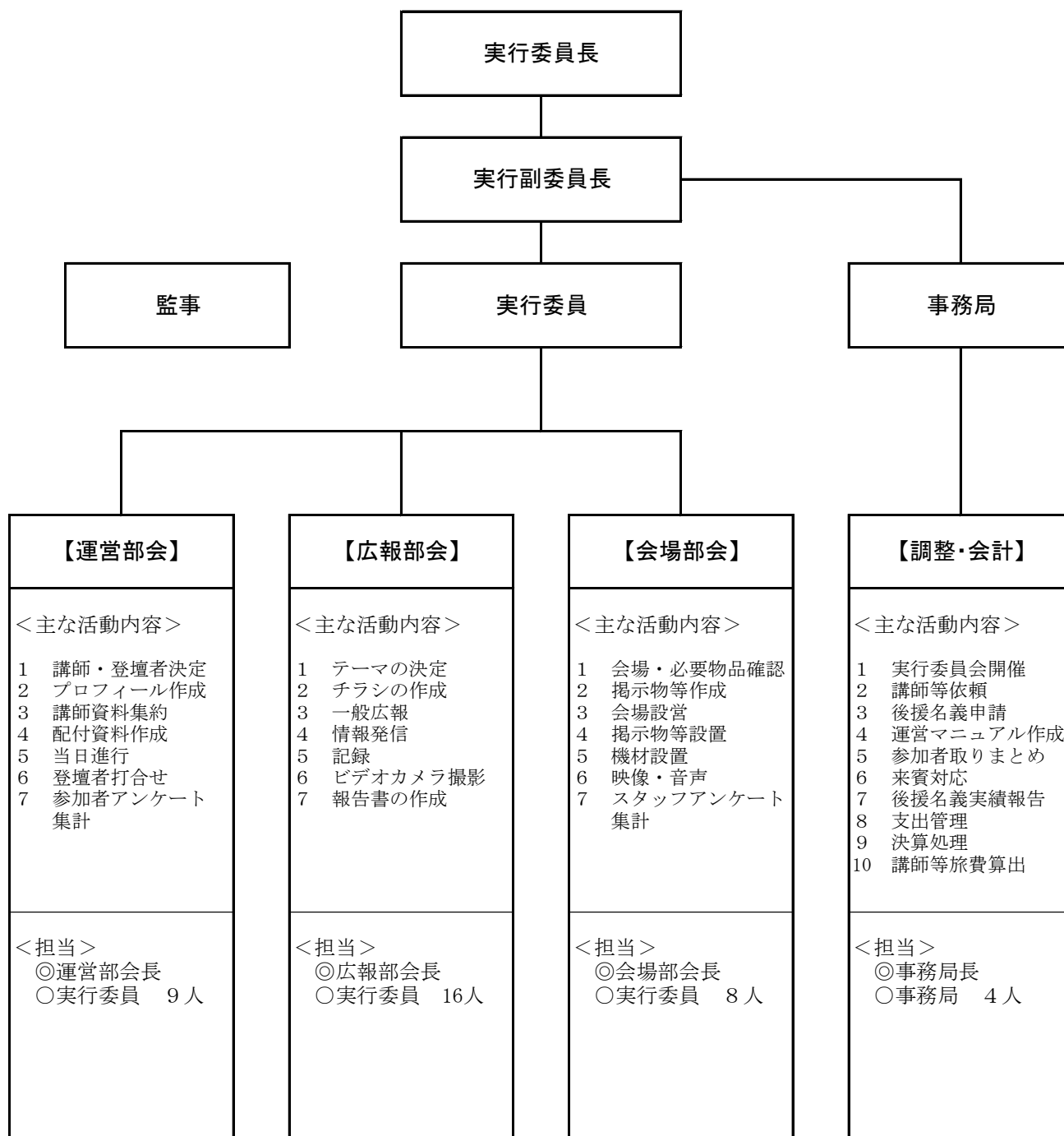
10 その他、お気づきの点、ご意見、ご感想等

- コロナ禍だが、今だからこそ社会教育でできることがあると思う。今後もどのような状況下でも、交流会を続けてほしいと思う。
- 特に今年度は事務局の皆様、実行委員の皆様は開催に向けてご苦労があったことと思う。本当に感謝している。本大会の配信を楽しみにするとともに、成功を祈っている。
- この時代、今まで以上に人とのつながりを持ちたい、と思っている方はたくさんいる。それらをどう結び付けるか、デザイン力を含め今後の活動を期待している。期限までまた視聴したいと思っている。
- 今年度は中止になるのかと思ったが、オンラインで開催できてよかったと思う。「学びを止めない」姿勢はどの分野においても共通すると思う。どうすれば開催できるかを考えて取り組む姿勢を私も今の仕事において生かしていこうと思う。
- 第6回大会はコロナという前例のない状況で実施が大変だったと思う。オンラインでも実施したことにより、第7回大会に繋がり社会教育の歩みを進めたと思う。
- とにかく開催にむけてご苦労があったことと思う、感謝。
- オンライン等のICTを活用して事業を実施する団体が多いことはとても刺激になった。ICTの活用には不安な面があるが、近隣の市町村や団体にアドバイスをもらいながら実施できそうだと感じ、次年度の事業を中止とせず開催できそうだと感じてよかった。私にとってとても有意義な研修となった。

1 事業の実施体制



2 運営組織・活動内容



Design to Next II

～ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育のあり方～

新型コロナウイルス感染症に係る、県独自の「緊急事態宣言」により会場参加は中止となりました。

開催日時 ~~令和3年1月23日(土) 13:20～16:30~~

会場 ~~本会場：茨城県水戸生涯学習センター~~

~~別会場：茨城県県南生涯学習センター (ライブ配信)~~

参加費 無料

対象者 学びを通じた地域の課題解決に関心がある方
(誰でも参加できます!)

第6回

関東近県
生涯学習・社会教育
実践研究交流会

共催 茨城県教育委員会、茨城県生涯学習・社会教育研究会、茨城大学
主管 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
協賛 NPO法人ひと・まちねっとわーく、NPO法人インパクト、NPO法人日本スポーツ振興協会
(公財)茨城県教育財団、(公財)日本教育公務員弘済会茨城支部
後援 福島県教育委員会、栃木県教育委員会、群馬県教育委員会、埼玉県教育委員会
千葉県教育委員会、神奈川県教育委員会、国立青少年教育振興機構
茨城県社会教育委員連絡協議会、茨城県公民館連絡協議会
協力 国立教育政策研究所、茨城県教育庁社会教育主事会

人類未曾有の大災厄（新型コロナウイルスの世界的パンデミック状態）の中、関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会は第6回を迎えました。実行委員会は従来通りの開催方式が「3密」状態を招くとの危惧から、中止にするかの判断を迫られました。しかし、社会教育の歴史は、社会の転換期や非常事態期に真価を発揮してきているとの判断から、実施することに決定しました。

「自粛は萎縮ではない、私たちはこの事態にどう立ち向かうのか」を念頭に、全国で活動する生涯学習・社会教育関係者に対するメッセージ性を強めた内容にすることにしました。社会教育は、学びを基本にする活動です。不安を生み出しているのは不明だからであり、不信も不安も「学ぶ」ことから乗り越えていくとの思いから、企画を組むことにしました。「コロナウイルスと社会」の関わりを学び（山極壽一京都大学前総長の講演）、最前線の現場で立ち向かっている関係者の課題を学び（パネルディスカッション「新型コロナウイルス対応の実際」）、最後に、社会教育が何を課題にすべきかを学ぶ（シンポジウム「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性」）の3部構成です。

実施方法も、「3密」を避けるという意味だけでなく、コロナ後の社会教育の可能性を創造するために、映像配信や双方向型交流の方式を組み入れました。

時代は急速に変化し続けています。私たちの道を発見・創造するために皆さんの参加を強く要望いたします。最後に、関係者の皆さんの尽力に感謝と覚悟を添えたいと思います。



関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
実行委員長
茨城大学 名誉教授 **菊池 龍三郎**

社会教育実践には、
その一つひとつに物語があります。

- あなたも、その物語に入り込んでみませんか
- あなたも、あなたの物語を考えてみませんか
- あなたとみんなの『幸せ物語』を創ってみませんか

第1部 令和2年12月中旬頃より オンデマンド配信(要申込)

基調講演 「人類の進化に合った教育とは何か」



講師 **山極 壽一 氏** (京都大学 前総長)

1952年生まれ東京都出身 霊長類学者・人類学者
京都大学理学部卒
京都大学大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学、理学博士
ゴリラ研究の第一人者
ルワンダ・カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキーセンターのリサーチフェロー
京都大学霊長類研究所助手、同大学院理学研究科助教授を経て同教授
2014年10月から2020年9月まで京都大学総長
【著書】
『「サル化」する人間社会』（集英社インターナショナル）
『京大式おもしろ勉強法』（朝日新聞出版）
『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』（毎日新聞出版）など多数

インタビューダイアログ 話し手：京都大学 前総長 山極 壽一 氏

聞き手：茨城県生涯学習・社会教育研究会 会長 長谷川 幸介

「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の新しい役割をどう考えるか〜基調講演を受けて〜」
実行委員長/茨城大学 名誉教授 菊池 龍三郎

第2部 本大会

令和3年 1月 23日 (土)

※12時より会場にて基調講演の映像を流しております

受付13:00

オープニング

13:20

本会場：茨城県水戸生涯学習センター 大講座室

別会場：茨城県県南生涯学習センター 中講座室1【ライブ配信】

パネルディスカッション

「新型コロナウイルス対応の実際」

13:40

パネリスト

(公社) 茨城県看護協会 会長

白川 洋子氏

新型コロナウイルス感染症に対応する医療・看護の現場を支える取組

コーディネーター

茨城新聞社編集局論説委員室 論説委員長

藤枝 智昭氏

つくばみらい市社会福祉協議会地域福祉推進課 課長

コロナ禍でも住民と共に歩む地域福祉活動

松尾 好明氏

水戸市泉町仲通り商店会 会長

忠 文夫氏

仲間を見捨てない 子どもに勇気と力を与えたい 商店会長の愛の行動

新型コロナウイルス感染症に係る、県独自の「緊急事態宣言」により会場参加は中止となりました。

休—憩

14:40

シンポジウム

「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性」

14:50

シンポジスト

前橋市桂萱（かがや）公民館 館長

茂木 勇氏

地域の人々の学びのために！公民館の新たな取組

コーディネーター

茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 主任社会教育主事

山崎 英男

茨城県立図書館 朗読・読み聞かせ講師

コロナ禍における読み聞かせ活動のあり方

澤 則子氏

桜川市教育委員会生涯学習課 社会教育主事

高島 誠氏

コロナでも学びを止めない！オンラインを用いた社会教育行政の挑戦

クロージング

茨城県生涯学習・社会教育研究会 副会長

池田 馨

16:20

第2部の様子は2月中旬頃より オンデマンド配信（要申込）いたします

第6回大会 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会【参加申込書】

FAX: 029-301-5339

E-mail: shogaku1@pref.ibaraki.lg.jp

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会事務局（茨城県教育庁総務企画部生涯学習課内）宛

FAXもしくは、E-mailにて
左記申込先へお申込みください。
※お一人ずつお申込みください。

ふりがな			
氏名			
所属		役職	
連絡先	TEL		
	E-mail	※オンデマンド配信視聴参加を希望する方は必須	

大会の出欠等 ※下記の太枠で囲まれた項目の希望する事項に○を付けてください。

会場参加（1月23日に水戸生涯学習センターもしくは、県南生涯学習センターでの参加を希望される方）

No.	内容	日時	参加・不参加 (1、2のどちらかに○)	参加希望会場 (1、2、3のいずれかに○)	申込締切
+	第2部 本大会	令和3年 1月23日(土) 13:20~16:30	1. 参加 2. 不参加	1. 茨城県水戸生涯学習センター (本会場、40名定員) 2. 茨城県県南生涯学習センター (別会場、50名定員、ライブ配信) 3. どちらでもよい	令和3年 1月12日(火)

新型コロナウイルス感染症に係る、県独自の「緊急事態宣言」により会場参加は中止となりました。

オンデマンド配信視聴参加（オンデマンド配信を希望される方）※YouTubeでの配信を予定しております。

No.	内容	期間	参加・不参加(1、2のどちらかに○)	申込締切
1	第1部 基調講演等	令和2年 12月中旬頃~ 令和3年 3月30日(火)まで	1. 参加 2. 不参加	令和3年 3月23日(火)
2	第2部 本大会	令和3年 2月中旬頃~ 令和3年 3月30日(火)まで	1. 参加 2. 不参加	令和3年 3月23日(火)

※参加を希望された方には、オンデマンド配信の準備が整いましたら、E-mailにて視聴URLをお知らせいたします。

- ・会場参加をされる方は、できるだけ公共交通機関をご利用ください。お車でお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。
- ・新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、会場参加をされる方は、マスク着用をお願いいたします。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により、大会内容等の変更の可能性があることをご了承ください。
- ・個人情報、本大会に関すること以外の目的では使用いたしません。
- ・当日の様子(写真、動画、アンケート内容等)につきましては、ウェブサイト(オンデマンド配信、SNS等)や報告書等で使用することをご了承ください。
- ・チラシ等のブース出展を希望する団体については、個別にご連絡ください。

本交流会の最新情報をFacebookでお知らせしています。下記QRコードからどうぞ！



【会場】本会場：茨城県水戸生涯学習センター 〒310-0011 水戸市三の丸1-5-38（茨城県庁三の丸庁舎内）
別会場：茨城県県南生涯学習センター 〒300-0036 土浦市大和町9番1号 ウラビル5階

【問合せ先】関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会事務局
(茨城県教育庁総務企画部生涯学習課内) 担当：國府田
TEL: 029-301-5318 FAX: 029-301-5339 E-mail: shogaku1@pref.ibaraki.lg.jp

4 大会参加者

■第6回大会参加者数一覧〔都道府県別（延べ人数）〕

(人)

都道府県	第1部	第2部	合計
福島県	2	2	4
茨城県	174	168	342
栃木県	9	9	18
群馬県	17	21	38
埼玉県	11	10	21
千葉県	4	4	8
東京都	5	5	10
神奈川県	1	1	2
新潟県	1	1	2
長野県	1	1	2
京都府	1	1	2
鳥取県	1	1	2
島根県	1	1	2
高知県	1	1	2
佐賀県	1	1	2
合計	230	227	457

【参考】

(人)

	1日目	2日目	合計
第1回大会	314	168	482
第2回大会	331	184	515
第3回大会	334	203	537
第4回大会	450	186	636
第5回大会	301	156	457

5 第6回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会 実行委員等名簿

No	役職	氏名	組織・職名	担当部会	備考
1	委員長	菊池 龍三郎	茨城県生涯学習・社会教育研究会 顧問(茨城大学名誉教授)	-	
2	副委員長	長谷川 幸介	茨城県生涯学習・社会教育研究会 会長	広報部会長	
3		池田 馨	茨城県生涯学習・社会教育研究会 副会長(NPO法人ひと・まちなつとわーく理事長)	運営部会長	
4		小田部 修一	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 課長	会場部会長	
5	委員	中村 麻子	茨城大学社会連携センター センター長	広報部	学識経験者
6		松橋 義樹	常磐大学人間科学部教育学科 助教	広報部	
7		中島美那子	茨城キリスト教大学文学部児童教育学科 教授	広報部	
8		儘田 茂樹	茨城県社会教育委員連絡協議会 会長	運営部	
9		檜山 久長	茨城県生涯学習・社会教育研究会 事務局次長	運営部	社会教育関係
10		栗田 将夫	NPO法人ひと・まちなつとわーく 事務局次長	会場部	
11		志摩 邦雄	NPO法人インパクト 県北生涯学習センター センター長	運営部	
12		法堂 泰明	NPO法人日本スポーツ振興協会 県西生涯学習センター 次長	広報部	
13		長谷川 馨	(公財)茨城県教育財団 茨城県水戸生涯学習センター 副参事兼企画振興課長	会場部	国・関東近県関係
14		菅谷 政之	国立教育政策研究所社会教育実践研究センター 専門調査員	広報部	
15		関 忠昭	福島県教育庁社会教育課 主任社会教育主事	広報部	
16		知久 鉄平	群馬県教育委員会事務局生涯学習課 社会教育主事	広報部	
17		阿左見 直昭	埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課 社会教育主事	広報部	県関係
18		尾上 夏子	神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課 主幹兼社会教育主事	広報部	
19		松崎 英政	茨城県水戸教育事務所 主任社会教育主事	運営部	
20		萩谷 佳之	茨城県県北教育事務所 主任社会教育主事	広報部	
21		野口 孝幸	茨城県鹿行教育事務所 主任社会教育主事	会場部	
22		荒井 克彦	茨城県県南教育事務所 主任社会教育主事	運営部	
23		野村 隆	茨城県県西教育事務所 主任社会教育主事	広報部	
24		田山 善堂	茨城県水戸生涯学習センター 主任社会教育主事	会場部	
25		小野瀬 静香	茨城県県北生涯学習センター 事業グループリーダー	広報部	
26		内野 武	茨城県鹿行生涯学習センター 企画振興課長	運営部	
27		勝田 篤	茨城県県南生涯学習センター 事業課長	会場部	
28		石上 未来	茨城県県西生涯学習センター 企画グループ	広報部	
29		木村 忠夫	茨城県立中央青年の家 主任社会教育主事	運営部	
30		佐藤 孝弘	茨城県立白浜少年自然の家 所長	会場部	
31		柴原 尚之	茨城県立さしま少年自然の家 社会教育主事	広報部	市町村関係
32		根本 純一	茨城県立図書館 社会教育主事	会場部	
33		飛田 雅大	東海村教育委員会生涯学習課 社会教育主事	運営部	
34		井上 一宏	常陸太田市教育委員会生涯学習課 社会教育主事	広報部	
35		根本 聡美	行方市教育委員会生涯学習課 参事(社会教育主事)	会場部	
36		大久保 正美	つくばみらい市教育委員会生涯学習課 課長補佐兼社会教育主事	運営部	
37		海老原 淳	常総市教育委員会生涯学習課 社会教育主事	広報部	
38	監事	澤畑 和宏	株式会社茨城新聞社地域連携室 部長	-	
39		飯塚 佳子	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 副参事兼課長補佐(総括)	-	
40	事務局長	大森 聡	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 課長補佐(振興)	-	
41	事務局次長	和田 秀彦	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 課長補佐(学習支援)兼就学前教育・家庭教育推進室室長補佐	-	
42	事務局	大月 光司	茨城県生涯学習・社会教育研究会 事務局長	-	
43		國府田 大	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 社会教育主事	-	
44		小松崎 健	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 主査	-	
45		石井 愛里	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 会計年度任用職員	-	
46	オブザーバー	小沼 希	茨城県立白浜少年自然の家 研修企画推進員	-	

6 歴代大会テーマ等

会場：茨城大学	第 1 回 大 会
大会テーマ	県域を越えて「学びによる地域づくり」の輪を広げよう！
事例発表 カテゴリー	(会場A) 学校・家庭・地域の連携 (会場B) 指導者養成・研修 (会場C) 地域課題の解決に向けた取組 (会場D) ボランティア関係 (会場E) 青少年教育

会場：茨城大学	第 2 回 大 会
大会テーマ	今こそ社会教育の底力を！
事例発表 カテゴリー	(会場A) 学校・家庭・地域の連携 (会場B) 家庭教育支援 (会場C) 地域課題の解決に向けた取組① (会場D) 地域課題の解決に向けた取組② (会場E) 青少年教育

会場：茨城大学	第 3 回 大 会
大会テーマ	社会教育の大きな波を起こそう！
事例発表 カテゴリー	(会場A) 学校・家庭・地域の連携① (会場B) 学校・家庭・地域の連携② (会場C) 地域課題の解決に向けた取組① (会場D) 地域課題の解決に向けた取組② (会場E) 青少年教育

会場：茨城大学	第 4 回 大 会
大会テーマ	LINK to Action! ～自分らしい未来のための現場報告～
事例発表 カテゴリー	(会場A) 公民館・施設と地域づくり 「子どもと大人が元気になる協力体制のつくり方」 (会場B) 市民の手による活動 「やりたいことを自分から実現する活動」 (会場C) 地域活動と学校 「学校と子どもたちが主役の地域活動」 (会場D) 環境・国際に関する活動 「環境保護・多文化共生で住民が居心地よくなる活動」 (会場E) 大学・図書館・企業との連携 「大学・図書館・企業が地域と共に成長する活動」

会場：三の丸庁舎	第 5 回 大 会
大会テーマ	Design to Next 支え合う心と熱い想いで明日を創る
事例発表 カテゴリー	☐ 学校と地域の未来をデザインする ☐ 学びの施設の活動をデザインする ☐ 持続可能な地域をデザインする ☐ 寄り添う心をデザインする

オンデマンド配信	第 6 回 大 会
大会テーマ	Design to Next II～ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育のあり方～
テーマ等	☐ 基調講演 「人類の進化に合った教育とは何か」 ☐ パネルディスカッション 「新型コロナウイルス対応の実際」 ☐ シンポジウム 「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性」

～ 編 集 後 記 ～

茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 社会教育主事 國府田 大	茨城県県北教育事務所 主任社会教育主事 萩谷 佳之	茨城県県西教育事務所 主任社会教育主事 野村 隆
「今後の社会は予測困難な時代が来る」とは、言われていましたが、新型コロナウイルス感染症により、現実のものとなりました。第6回大会は、従来の形から変更せざるを得なくなり、それは、チラシの取り消し線にも表れています。そのような中、大会を開催できたのは、関係者の皆様の支えがあってこそだと思います。「困難な状況であるからこそ、生涯学習・社会教育が力を発揮する。」ことを学んだ1年となりました。	社会全体が新型コロナウイルスへの対応に追われる中で、大人も子供も大きなストレスを抱えながらの生活が続いています。今まで以上に生涯学習・社会教育はチームとしての組織力や先を読む洞察力が求められていると思います。山極先生は、人は成長するために親以外の手が必要になる時期があると今回の基調講演で話されています。原点に返り、子供たちが未来に対して夢や希望を描けるような社会づくりを推進したいです。	未曾有のコロナ禍のもと、その今だからこそ、できることをやる。人と人をつなぐ生涯学習・社会教育の在り方が改めて見直され、その真価を問われています。今大会は形にとらわれず、あらゆる可能性を探りました。参加協力いただいた皆様の熱い思いをまとめ、広く周知できるよう心がけました。何よりも「前へ進む」ということを念頭に報告書を作成いたしました。広報部の皆様には無理なお願いをしました。ご理解、ご協力に心から感謝いたします。

facebook でつながろう！



関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会のページは
QR コードからどうぞ！



令和 3 年 3 月発行

<編集・発行> 第 6 回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
実行委員会

<事務局> 茨城県教育庁総務企画部生涯学習課振興担当
〒310-8588 茨城県水戸市笠原町 978 番 6
E-mail shogaku1@pref.ibaraki.lg.jp
TEL 029-301-5318 FAX 029-301-5339